August 25th 1903.

Report of the Sericultural Association of Japan.

NO. 135.

大日本蠶絲會報

第百參拾五號

明治卅六年八月廿五日

（明治三十七年第三種郵便物認可）

●論說
●蠶絲業一班　酒匂常明
●桑蠶に就て　農學士　中村彦
●絹蚕國に就て　農學士　馬場由
●蠶の種類一定に就て
●蠶の根原研究　理學博士　佐々木忠次郎
●蜘蛛の根原研究　農學士　宮原忠正
●秋蠶の飼養　農學士　館三之吉
●寄蚕外五態蠶飼養視察談　農學士　中村彦
●支那蚕業視察談　農學博士　鈴木梅太郎

●雜錄
●風穴調査山梨縣甲斐風穴　●長野縣製絲に關する器具機械の特許法明一班
●明治三四年度蠶種檢査成績の概況

●統計
●明治三十六年中生絲類及紬物類輸出入前年對照表

●問答
●桑木の別節に飲き貢問答　●蠶組の件に飲き貢問答　●蠶の件に飲き貢問答　●蠶家の件に飲き貢問答　●風穴構造の件に飲き貢問答

●絲況
●横濱市場　●紐育市場　●里昂市場　●米國市場　●上海市場

●外報
●清國蠶業の狀況　●米國に於ける蠶絲業　●清國玉繭の輸入に飲て　●蓖麻の蠶絲業　●米國に於ける蠶兒の飼養　●亞弗利加の養蠶　●米國の蚕絲輸入稅問題

●雜報
●技師委員の囑託　●通信委員の囑託　●京都蠶業講習所卒業式　●東京蠶業講習會生絲品位定　●農學博士村田彦　●神戸製絲會社　●地力の養蠶　●蠶業は富家の業として不適なる乎　●中外商業會に於ける受賞者　●人事欄

The Association ; No. 2. Mitoshirocho, Sanchome, Kanda, Tokyo, Japan.

大日本蠶絲會編纂

蠁蛆調査

蠶業界に於ける蠁蛆の被害は年一年に猖獗を逞ふし漫然看過すべからざるものあり於茲平本會博士に嘱して是れが被害の程度及び撲滅方法を調査し全國に亙り蒐集し以て一冊となし本會満十周年の紀念として鉛槧に附したるの即ち本書なりとす今や蠁蛆の荒害を憂ふる者多く江湖の需めに應せんとす蠁蛆の荒害を増列しての諸君は至急申込あらんことを請ふ

農學博士鈴木梅太郎君著

桑樹栽培法

實價郵税共金拾五錢

蠶業に關する最新の養蠶に關する伊太利及匈牙利國に於ける桑樹栽培法の調査は農務局に付せられたるものなるが斯業上頗る稗益ありと認め本會特に請ふて允許を得當業者諸君に頒つことゝなせり有要諸君は部數限りあり至急申込あらんことを請ふ

實價郵税共金貳拾錢

大日本蠶絲會

大日本蠶絲會報廣告料（三十五年十二月改正）

特等	一頁半	一頁	一頁半	一頁	一行
一回乃至二回 會員外	十圓	六圓	四圓	八圓	二十錢
一回乃至二回 會員	八圓	五圓	三圓	六圓	十六錢
三回乃至六回 會員外	八圓	五圓	三圓	六圓	十六錢
三回乃至六回 會員	六圓	四圓	三圓	五圓	十四錢
七回以上 會員外	六圓	四圓	三圓	五圓	十四錢
七回以上 會員	五圓	三圓	二圓	四圓	十二錢

一頁半 百四十行 一頁 百行 一頁半 百四十行 一頁 百行

四分の一頁未滿は行數を以て計算す
特等は四分の一頁未滿を例に依る
欧文は特等の例に依る

◉本報定價 一ヶ年分 前金拾五錢

明治三十六年八月二十五日印刷發行

編輯兼發行人 東京市神田區美土代町三丁目二番地 小池市松

印刷人 東京市神田區美土代町二丁目一番地 島連太郎

印刷所 東京市神田區美土代町二丁目一番地 三秀舍活版所

發行所 東京市神田區美土代町三丁目二番地 大日本蠶絲會

電話番號本局一千四百七十三番

林工場生繭乾燥器に關する報告

專賣特許第五千六百七十四號追加第五千九百廿九號

◎新式乾燥裝置之模型

右は目下歐洲留學中の農學博士鈴木梅太郎君歐洲最要の養蠶に關する伊太利及匈牙利國に於ける桑樹栽培法の調査は農務局に付せられたるものなるが斯業上頗る稗益ありと認め本會特に請ふて允許を得當業者諸君に頒つことゝなせり有要諸君は部數限りあり至急申込あらんことを請ふ

大日本蠶絲會

實價郵税共金貳拾錢

第五回内國勸業博覽會に於て三等賞牌を受領せり蓋し今回の博覽會にて乾燥器の模型にて受賞の榮を得たるものは獨り本裝置のみなり

◎弊場專賣特許新式乾燥裝置及釋便生繭乾燥倉用蒸汽蠶具消毒器に就き今春御注文を蒙り据付並候四十有餘ヶ所よりは實地使用の成蹟表に謝狀又は證明書を寄贈せられたるもの多し就中越後小出銀行よりは金三拾圓に左記褒狀を添へ贈與せらるゝの光榮を得たり

證明及褒詞

一林新按生繭殺蛹乾燥器

設置場製作に係る該器本所所用の三台は巧妙にして乾燥繭の色澤の如き解舒頗る好良にして繰糸に適する故に各製糸家に推賞せらるゝ所なり依て本年重ねて本所の入石の

四化蠶種實費販賣

一種類　角又　催田姫（蟲質強壯何れも大巢）
百蛾附壹枚七拾錢　原種用框製壹枚四拾錢
八月中旬より九月中旬迄引續き製造
右は大方の試驗に供し度實費を以て販賣仕候に付御飼育の上結果御報告被下度候也
茨城縣結城郡上山川村
櫻井養蠶場

桑苗

自製桑苗は全國各地養蠶家の御注文に應じ輸送し種類の正確許り木精良育を博す例年の通り好たる高苗せるを以て多少に拘らず御注文を乞ふ桑苗三十餘種説明附目錄は往復端書申込次第郵呈す
埼玉縣兒玉郡丹莊村大字植竹
各縣桑苗製作所蠶具販賣所
試驗場桑苗御用達　博榮館
（發電報號ヲハタ）　館主大島和輔

春蠶種　無毒強健　北海道蠶種豫約販賣廣告

代價　小石丸青熟、又昔、
框製原種用種百蛾に付金壹圓六拾錢
普通製百二十蛾付（卵量約八匁）
一枚金壹圓貳錢御注文の際は代價の三分の一以上相添御申込被下度殘金は蠶種御引取の節御拂込のこと御注文の際皆金御拂込の分は代價一割を減ずる
○豫約期限　七月三十日限り御名入製造の御注文は平付二十枚以上
○割引　同購入又は取次販賣希望の方は特に御相談被下度候
○送種費　一切本館の負擔とす
○爲替局　石狩國上川郡永山郵便電信局宛
○代價　全面付一枚金壹圓七月十五日限り代金添付御注文被下度候
○發生豫定　早きは七月下旬　晩きは八月中旬
箱代送種費不要
之通り豫約販賣仕り候間何卒多少に拘らず期限内に御注文被仰付度奉願上候
北海道上川郡永山十二丁目三六一番地
弘蠶館　宍戸儀助

秋蠶種　大草、飛白

例年

家外蠶種廣告

一家外蠶の特殊
青を主とし催青より家外に於て飼育し二眠后初て室内に收容し專ら開放育を以て上族に至る特に給桑は撐立巳來終始全芽育を以てす之か爲蠶兒健全活潑にして結繭優美發蛾又好良の結果精良無毒の蠶種を製出す

春蠶
●又昔●中巢●白龍巳上三種

秋蠶
●國一●ウヂラ●中巢巳上三種

代價
●原種用框製一枚（廿八蛾）金七拾錢
●製絲用平附壹枚金壹圓七拾錢
總て前造費は本館負擔とす

代金割引
爲替振込は野澤郵便局の事
●五枚以上五分割引
●壹枚以上貳割引
●白枚巳上共廿枚以上

發送
●春蠶は七月十日後製造順に遞送の事
●秋蠶は八月廿日より

附言
博習生募集其他詳細は本會報第百參拾號に參照あれ
豫約販賣及會報注文は至急御注文被下度候
右御要望の諸君は至急御注文被下度候

商標　家外蠶種製造業　松實館主　相澤鐵平
〔電信略號〇テ〕

西多摩支會品評會開設廣告

第一條　西多摩支會品評會規則
六日間東京市麻布區西多摩郡役所内に開設す
第二條　本會は明治三十六年九月十一日より二十七日迄
第三條　出品は總て出品人の製産物に限るものとす
第四條　出品物は品會の費用を補ふ爲め總て本會へ寄附但しも出品人の方に於て特に其返戻を望まるものは相當代價荷造及運送の費用を自弊せらるゝものとす
第五條　品會中は毎日午前八時より午後四時迄公衆の觀覽に供す
第六條　出品物の如き種類は左の如し
蠶種、繭、製造一枚、製造二枚、繭、壹斤以上、生絲、器械
島田玉繭、繭とも十八枚以上十六年九月十日迄に必ず到着するもの
第七條　出品物は明治三十六年九月十日迄に必ず到着するもの
第八條　出品に要する費用は總て出品人の負擔とす
第九條　出品人は毎年出品目録を製し八月三十一日迄に必ず女會へ出すべし
第十條　出品は總て審査員の審査に付し左記等級に依り賞を附す
一等賞　二等賞　三等賞
第十一條　審査員は本會に派遣する者に付き女會員之を嘱托す
第十二條　一人一種類の時に數品なる出品は上位等の品詳なるものとす
第十三條　賞は銀盃　銅帶賞　木杯　賞狀
第十四條　審査に關する一切の費用は本會技藝委員若くは一人一種類の時に數品なる出品は上位等の品
第十五條　賞狀は一人一種類の時に數品なる出品は上位等の品
第十六條　賞狀は一人一種類の時に數品なる出品は上位等の品
第十七條　賞狀は一人一種類の時に數品なる出品は上位等の品
第十八條　賞狀は一人一種類の時に數品なる出品は上位等の品
第十九條　賞狀は一人一種類の時に數品なる出品は上位等の品
第二十條　賞狀は一人一種類の時に數品なる出品は上位等の品
第二十一條　賞狀は一人一種類の時に數品なる出品は上位等の品
第二十二條　賞狀は一人一種類の時に數品なる出品は上位等の品
第二十三條　賞狀は一人一種類の時に數品なる出品は上位等の品
第二十四條　賞狀は一人一種類の時に數品なる出品は上位等の品
東京市西多摩郡役所内
大日本蠶絲會西多摩支會

蠶種
長野縣
蠶種
蠶種
蠶種

今此事の改善研鑽を加ふべき問題中二三を指摘して見んか、先づ第一に指を屈すべきは夏秋蠶飼育の事である。

抑も夏秋蠶飼育の利害に就ては當業者中にも種々の議論あることなれども、經營の方法にして宜しきを得れば大に利益のあるもので、啻に農家の經濟を助くる許りでなく延て國家經濟の上にも相及ぼすことは言ふまでもない、之に反し經營の方法にして宜しきを得ざるときは其弊害も亦甚大なるもので、折角繁茂しつゝある桑園を荒廢せしめ、海外に聲價を博する日本生絲の源泉を涸らすの憂がある、故に深く注意を拂はなければならぬ、注意を拂ふの要點は言ふまでもなく桑樹の栽培である、夏秋蠶飼育の爲に春蠶用の桑葉を用ること、語を換て之を言へば同一の桑園より再三摘葉することは桑樹の生理上好ましからぬことで、遂に其結果として桑樹を衰弱せしめ前述の如き狀態に陷る、故に之に對しては相當の桑樹栽培法を講究し此等の患を除かねばならぬ、是は目下我蠶絲業界に於ける重要問題であるから充分に

又桑樹萎縮病に就ては先年來調査所を設置せられ、學者の研究に依て其原因は稍闡明となりたれども、之れが豫防は未だ完全と認むる方法に接しないから宜しく講究の歩を進め栽桑家をして愁眉を開くの期に達せしめられたい。

次に蠶種の改良と其一定である、蠶種の改良は蠶種檢査法の施行以來漸次病毒を減じたると、規模の小なる製種家は減少し信用ある製種家は次第に規模を擴張し確實なる業務たらしめたるの傾向あるは國家の爲喜ぶべき現象である、然れども生產せらるゝ蠶種皆悉く善良のものの許りでない、殊に其種類の雜駁であることは覆ふべからざるの事實で、之れが爲生絲の品位に影響を及ぼすこと少くない、故に海外の華客より生絲品質の雜駁、纖度の不齊等に就て苦情を申込まれたること數々である、それであるから出來得る範圍内にて蠶種の一定を行ひ改良を加ることが刻下の急務である。

蠶病消毒及び蠶蛆驅除　蠶業の盛況に伴ふて諸種害毒の之を防碍するは止むを得ざる勢であるが、近來各種の病菌益々延し養蠶家を惱し收利を減殺せしむ

るの傾向がある、此患を除くには諸子の學び得たる如く蠶兒を健全に飼育すると消毒法を實行するより外に道はない、又蠶蛆は本邦固有の害蟲であつて年々猖獗を極め、北海道を除くの外侵襲せざるの所なく一歳一千二百萬圓以上の損害を與ふるに至つた、此等に關しては國家も相當の豫防驅除の手段を採るに至るべきも、諸子も亦將來極力撲滅に力を盡されんことを希望する。

殺蛹乾繭法の改良と普及の必要なること　殺蛹乾繭法の改良と普及は既に蠶絲業界の輿論となり居るにも拘らず、事の實際を顧れば尚其不完全の爲に折角の良繭を損傷し、或は此法を知らざる爲に奸商に乘ぜらるゝことは往々耳にする所である、是れ又注意を加へ當業者を誘導して改良と普及とに力を盡さなければならぬ。

次に製絲業に於て之を觀るときは生絲の海外に輸出せらるゝこと年々增加し盛大の樣であるが、需要者より切々批難を受けることが前述の通てある、又實際事業の狀態に於て之を見るも伊太利佛蘭西支那の夫れと比較して遜色ある樣に考へる、即伊佛支那では常に四口を以て繰絲をなすも我國では二口以上のものは甚だ少なく、此は繭の種類及び保繭繰絲の方法等に關係することであるべしと考へらるゝが、兎に角此等缺點の何れの邊に存在するかを講究し、伊佛或は支那の夫れと同一の境遇に進むこと、否寧ろ夫れを凌駕せしむることは必要であると認ひる。

又只今大臣閣下の訓諭せられたるが如く共同一致の事は殖產興業に採りては頗る必要條件である、就中此蠶絲業に於ては其必要を感ずること極めて切なるものである、例へば前段の蠶病消毒、殺蛹乾繭の如きも之れを共同して經營すれば經濟的で且つ目的を達することが迅速である、共同一致即ち產業組合法利用に關しては充分考究し盡力せられんことを望む。

右の外蠶絲業に關する法令も澤山ある、諸子は此等法令の活用に就ても大に力を致さねばならぬ、又多くの人を指導し且つ之れが模範となるべき任を有して居るから、益學術の研究に怠らず事に當りて熱心に勉强せられんことを切望する次第である。

●柞蠶絲に就て

大日本蠶絲會
技藝委員　農學士　中村　彦

第一章　緒言

近時清國より柞蠶絲の我國に輸入する數量頗る急進せるものあり、即ち明治二十七年には數量一萬斤に滿たず、價額僅に一萬餘圓のもの同三十二年に至り數量十五萬斤餘價額三十七萬餘圓に進み、同三十五年には更に增加して數量は四十萬斤餘に上り價額は約百萬圓に達せんとす。

今明治二十七年以降每年の輸入額及百斤の價格を擧ぐれば左の如し。

柞蠶絲輸入額

年次	數量	價額	百斤の價格
明治二十七年	九、七七五斤	一、一九六四圓	二二二
同　二十八年	二二、五九二	三一、二九五	一三九
同　二十九年	一〇、〇九四	一五、一四九	一五〇
同　三十年	六、六〇〇	一一、三七〇	一七二
同　三十一年	一五、七六〇	三七、八七二	二四〇
同　三十二年	一五一、八五〇	三七五、一八九	二四七
同　三十三年	一四八、二四六	三五一、三五九	二三七
同　三十四年	二一三、〇一八（三四四、〇八二メ）	四三三、一八五	二〇三
同　三十五年	四一、八四六三（六六、九五四メ）	九五五、二七五	二二八

茲に於てか紡績絹絲、玉絲及生絲製造業者は思へらく柞蠶絲は我蠶絲界を蹂躙する者なり、宜しく柞蠶絲の輸入稅率を高め以て之れが輸入額の增進を防がざるべからずと、其結果たる遂に左の意見書の發表となり、次て政府に建議し帝國議會に請願として現はるゝに至れり。

柞蠶絲輸入稅增率ニ關スル意見書

本邦ニ於ケル蠶絲ハ比年官民一致シテ其擴張ト改善トニ盡シタルカ爲ニ其進歩ノ敏者ナル殆ント他ニ類例ナサル所ニシテ現ニ生絲ノ產額ハ貳百萬貫ヲ上下シ之ヲ二十年以前ニ比スルトキハ三倍以上進捗ヲ示セリ多數農民ノ生計ハ此蠶絲ニヨリテ補足セラレ輸出入ノ權衡ハ此蠶絲ニヨリテ平準ヲ保ツ眞ニ本邦產業ノ巨鎭ニシテ國家經濟ノ關鍵ト稱スヘキモノタリ其上下協力シテ以テ斯業ヲ輔導愛護スル所ノモノ誠ニ當然ノ事タリト謂ツヘシ

然ルニ近年北淸地方ヨリシテ柞蠶絲ノ輸入ヲ見ルニ至リ用途漸々廣クシテ輸入愈々多キヲ加ヘ遂次此ノ我國家的產業タル蠶絲界ノ利益ヲ侵害蝕ムスルノ傾向アリ今ニ於ヒ能ク防遏ノ策ヲ講スルニアランバ前途所ヲ嘗ムトモ及ハサルノ憾アラントシ眞ニ寒心ニ堪ヘサラントス

茲ニ柞蠶絲ノ用途タルヤ綿珍、風通、絲織類及ヒ盛ンニ紡綿交織等ノ稱ハレ明治三十一年ノ如キハ輸入ノ數量僅々壹萬五千斤餘ナリシニ翌三十二年ニ在テハ一躍シテ十五萬斤ノ輸入ヲ見現ニ昨三十四年ノ如キハ全國ニ於ケル統計ヲ知ルニ由ナシト雖モ八王子外五ケ所機業地ニ於ヒタル消費額ノミニテモ數量凡三十萬斤價額壹百十六萬圓ノ多キヲ見ルニ至リ其ノ需要ノ盛劇ニ擴延セル實ニ驚目驚耳ノ外ナキモノタリ惟フニ向後益斯ノ如キ速度ヲ以テ愈々倡勝ヲ逞フスルヤ否ヤニ至テハ素ヨリ斷言シ難シト雖モ其ノ大勢ヲ達觀スレハ進ムコトアルモ退クコトナク愈々我蠶絲界ヲ蹂躙スヘキハ眼ヲ之ヲ掌ニ指スカ如シ而カモ之カ爲ニ直接打擊ヲ蒙ルモノヲ挙ケ、玉絲及ヒ紡績絹絲等トナス夫レ是等ノ純絲ニシテ彼柞蠶絲ト持抗セント欲セハ價額ニ於テ競爭ヲ試ミサルヘカラサルカ故ニ廻テ關及層絲類ノ價額ヲ低下セシメ蠶絲全體ノ利益ヲ減殺セスンハ止マサラントスは是レ豈ニ國家ノ爲ニ憂フヘキコトナラサルヲ得ンヤ

凡ソ國家的產業ナルモノハ概シテ多クノ生產者ニ由リテ組立テラルヽモノニシテ仔細ニ檢算スルトキハ戶々ノ利益ハ甚タ僅ナルヲ常トス唯其レ戶々ノ利益ハ僅少ナルモ集メテ國家ノ上ニ回リ集リテ河海ノ大作ルモノタリ而カモ利益源ノ源タシテ人民次第ニ其業ヲ捨ンカ又逃ニ其河海ノ翼ヲ爲スニ由ナカラントス

抑モ蠶絲ノ利益ハ僅眞ナル生絲ニ於テノミ收メ得ルモノニアラス其副產ニ係ル下等生絲ニ層絲類ニ各皆販售ニ遺憾ナクシテ初メテ其利ヲ全フシ得タルモノハ下等生絲ニ止マラシ中是等下等生絲ニ繼持スルヲ得ンヤ況ンヤ世運ノ進歩ハ貴金其他ノ生產費ヲ高マシメ當業者漸ク養蠶ノ源利ナルニ痛心シ製絲家亦比々倒產見出ノ今日ニ於テオヤ又況ンヤ玉絲及紡績絹絲ノ如キ發達幼稚ナル境界ニ在ルノ今日ニ於テオヤ

是サ歐米文明ノ國ニ從スルモ國家的產業及ヒ將來發達ヲ奬勵スヘキ產業ニ向テハ有ラユル保護ヲ與ヘテ之ヲ助長スルヲ常トス彼ノ我玉絲ノ如キニ至テハ近年海ノ其用途ヲ廣メ長野群馬島根島等ニ止マラシテ愛知縣二川ノ如キ岐阜縣御嵩ノ如キ工場ノ勃興ヲ喚起スルニ至リ遂シ斯ノ如キ副產物精製業ノ發展ハ眞ニ邦家ノ爲ニ慶スヘキ所ニシテ現ニ伊太利政府ノ如キハ玉絲製造ノ事ニ向テハ無賃ヲ協スニ至レルカ如キ誠ニ故ナシトセサルカ獨彼ノ層絲ト純紡績絹絲製造ノ如キ本邦ニ在テハ寧ロ今ハ萌芽ノ時代ニ屬スルヲ以テ能ク其風露ヲ防キテ完全ナル發育ヲ遂ケシムルニ勉メサルヘカラサルニ今ヤ將ニ此ノ柞蠶絲ノ蹂躙ニ委セラレントスは誠カ邦家ノ爲ニ瞑想セサルモノアラン

政ハ曰ク柞蠶絲輸入增進ニ逐度急劇ナリトスルモ之ヲ我蠶絲絕生產額ニ對比スレハ實ニ僅少ノ數量ニシテ敢テ顧慮スルノ價値ナキモノタリト嗚呼微悉輕重ハ之ヲ謬樂スルノ必要ナシト云カ況ンヤ絹蠶ノ滅々トシテ進ミツヽアルニ於テヤ若シ其勢稍ヽ衰盲ヲ怪スニ至ル俄ニ之ヲ抑制セントスルモ亦奈何トモ爲ス能ハサルヤ必然ナリ

夫レ我蠶絲ハ國家的產業ナリ而モ之ニ對シ侵害ヲ與フル事狀アラハ其翻ス所間フカ奚セスンヤ國家ハ速ニ之ヲ芟除スルノ方策ヲ講シ以テ斯業ヲ鍵全安泰ナラシメサルヘカラス是レ何人ト雖モ異議ナキ道理ニシテ今日ニ於テ速ニ柞蠶絲ノ輸入稅ヲ增加シテ以テ之レカ强壓ヲ逞フスルヲ防キ蠶絲ヲ保護セラレンコトヲ希望スルハ實ニ偶然ニ

アラサルナリ

以上ノ理由ナルヲ以テ輸入税定率一、五（法律規定）即從量税現行下毎百斤參拾錢五拾錢三厘（勅令規定）ヲ自今三、五トシ毎百斤七拾壱錢四厘ニ改正シ以テ柞蠶絲ノ輸入ヲ抑遏シ我蠶絲業界ノ利益ヲ保持スルハ目下ノ急務ト信ズル所以ナリ

此意見書の發表せらるゝや幾許も無く輸入柞蠶絲取扱業者及機業者は正反對の意見を持し、柞蠶絲輸入税率輕減請願書を其筋に提出せり即ち左の如し。

柞蠶絲輸入税率輕減請願書

機業界ハ近來類リニ不振ヲ唱ヘ同業者ハ往々休業或ハ倒産ノ不幸ニ陥ルモノアルニ至ル而カシテ其重ナル原因ハ原料ナル絲價ノ高價ルニ反シテ其製絲品ノ價格ハ著シク下落シ且ツ其實行高ヲ宜シカラザル事實敢テ相價ハザルニ因ル

此時ニ當リテ北清ヨリ輸入スル柞蠶絲ナルモノハ其品質生絲ニ及ハサルモ絹紡蠶絲ニ優リ絹絲ノ代用トシテ最モ適當ナルガ上ニ價格モ亦極メテ低廉ナリ一タビ此柞蠶絲ヲ發見シタル機業家ハ九死ノ間ニ一條ノ活路ヲ認メタル思ヲナシ鑑ツテ此低廉ナル柞蠶絲ヲ使用シテ諸種ノ製織品トナシ外ニ向ツテハ新販路ヲ開キ内ニ在ツテハ幾多ノ工男工女ヲシテ其業ヲ得セシムルニ至ル然レトモ歳月漸漸ト白染色等充分ノ好成績ヲ見ル能ハズ今ヤ專ラ其研究中ニ驚シ此將來有望ナル柞蠶絲ハ所謂幼稚ノ時代ニシテ之ヲ保護シ之ヲ助長シ之ヲ發達セシムベキ時期ニアラズヤ

然ルニ本年四月ヨリ百斤ニ付約七圓ノ税率ヲ増加セラレ加フルニ爲替相場ノ激變ハ該絲百斤ニ付キ約五拾圓ノ價格ヲ品迫セシメ漸クニ發達ヲ見ントシタル柞蠶業界ハ苦悩ヲ抱キ苦惨ヲ嘗メ社蠶ノ社蠶ヲ放キタル機業界ハ再ビ悲鳴ヲ挙ケ絶ハントス今左ニ増税ノ不利不當ナル理由ヲ述フ

抑柞蠶絲ノ北清地方ヨリ輸入スルモノ増增加シ其名聲ノ高マリタルニ從ヒ蠶絲業者（機業者）絹紡紡績業者）ハ如キハ少ク爲メニ其本業ヲ奪ハルヽモノヽ如ク興惟シ遂ニ柞蠶絲ヲ強敵視スルノ結果ヲ輸入税率増加ヲ主張スルモノアルニ至ル之レ畢竟二業者ノ杞憂ヨリ出タルモノニシテ柞蠶絲ノ輸入ハ却チ國家産業ノ上ニ於テ大ニ利スルトコロアルヲ以テ二業者ヲ益スルコトヽ亦多少ニ過ギタル純絹紡用ノ用ヲ來リシ各種織物ニ代用スルニ至レハ自カラ純絹ハ品位盛衰ナルモノニノミ用ヰラレ偖其價格ヲ高ムルハ自然ノ勢ナリ即チ純絹ノ柞蠶絲ニヨリテ其特長ヲ發揮シ得ルモノト云ハザルベカラズ故レ柞蠶輸入ノ國家産業ニ利益アル第一理由ナリ

右ノ如クシテ純絹ノ品質ノ貴キチ知ラバ本邦蠶業者ハ製絲法ノ改良ニ注意シ可成屑物ヲ副生セシメザランコトニ力ノ從ツテ座繰ハ器械繰トナリ品質一定スルニ至レハ輸出モ亦益々盛ニナラントスルハ理ノ當然ナリ輸出旺ナルニ至レバ現ノ如キ少數ノ柞蠶輸入アリト雖モ決シテ該業者ノ妨害トナラザルハ明ケシ而カシテ一面ニ本邦ノ絹紡業亦未ダ幼稚ノ域ヲ脱スルコト能ハズ現ニ本邦蠶業者ノ意ヲ充タスニ足ラザルニヨリ或機業家ハ本邦ノ製産品アルニモ拘ハラス特ニ輸入品ヲ仰ケ輸ヲカラス而カモ該絹紡績業者ハ何等痛痒ヲ感セレバ絹紡輸入ノ防遏ニ努ムルモノヽ如カリ却チ柞蠶輸入ニ重積スルガ如キハ其失當モ亦甚ダシカラズト柞蠶ノ輸入ハ絹紡業者ニ影響スル所ナク寧ロ之レニ警醒ヲ與ヘタルモノニシテ即チ柞蠶絲入ノ國家産業ヲ益スルチ認スベキ其第二理由ナリ

柞蠶ナ最モ多ク使用スルハ屑繊地方ノ機業家ニシテ主ニ絲織（木綿織物ノ織絲ニアラズ）ニ用ヰタルモノ）ニ適用ス從來純絹ヲ用ヰシニ代ハタルナリ其需用甚ダ廣ク且ツ廉ナルヲ以テ一般世上ノ不景氣ニシテ純絹ノ品質セル場合ニモ柞蠶絲使用者ハ能ク數十萬ノ職工ヲシテ其業ヲ得セシメタル如キハ確カニ柞蠶絲ノ庇護ニ云ハザルベカラス之ト同一理ニヨリ京都西陣地方亦然リ然ルニ一朝柞蠶ノ輸入杜絶セバ是等幾十萬人ノ勞役者ハ忽チ其職ヲ失ヒ路頭ニ迷フニ至ルベシ柞蠶輸入ガ一面ニ勞働者ヲ保護シテ國家ノ産業ヲ益ツヤアル其第三理由ナリ

前記絹織、西陣ニテ主ニ繻珍等ニ柞蠶ヲ用フルガ爲メ絹紡絲ノ用途ヲ減殺セラレ蠶業者ノ業ヲ失フモノアルニ至ラントモ是レ皮相ノ見ノミ絹紡絲ハ本邦輸出品ノ巨額ニシテ精良ナル製絲ハ滋潤ナル輸出セラル、ニアラズ蠶業者技ニ留意シテ其柞蠶ニ代用セラルベキ絹絲ヲ精製シタランニハ一面ニ價格ノ低廉ナル柞蠶ノ輸入アリト雖モ一面ニ價格ノ高位ナル製絲ノ輸出ヲ増加スルニ至ルベシ是レ柞蠶ノ輸入ガ當ニ國家産業ヲ益スルノミナラス國家經濟ノ上ヨリ打算シテ利スル所頗ル大ナル其第四理由ナリ

税率ヲ増進シテ柞蠶ノ輸入ヲ防遏シタリトセバ其國家産業上ニ及ボス不利ハ左ノ一點ニテモ明ラカナラン

柞蠶絲ハ主ナル原料トシテ製品若シハ綿物ノ海外各國ヨリ輸入セルモノヽ總計ヲ示サン（明治三十四年度）

三七九、四〇二圓　絹織天鵞絨（但シ此ノ絹織ハ柞蠶絲ナ云フ）

（種別）　（數量）　（價格）　（摘要）

一、六八〇、八一四　　羽織

一、六、八〇〇　　襟巻（製品）

一、二二、三二五　　支那絹織

以上各種ノ製品ハ已ニ内地ニ於テモ製織セラレタルヽアルニモ拘ハラス斯ノ巨額ノ輸入アル所以ノモノハ必竟本邦ニ於テ未ダ其製織ノ効稚ナル製產ノ少額ナル品質ニ外ナラズ故ニ將來益々盛ニ製造所ナ設ケ大ニ柞蠶絲ヲ輸入シ各種製品ノ輸入ヲ防遏スルノ目的ヲ以テ低廉ノ製出スルコトヲ得バ其利スルトコロ蓋シ尠小ナラザルナリ是レ柞蠶輸入ノ國家産業ヲ益スル其第五理由ナリ

（備考）

三十四年度ノ柞蠶輸入高凡二千梱

内　尾濃地方　六分

京都　三分

各地方　一分

右之理由何卒御諒察之上改正法律案御提出被成下度伏テ請願仕候也

兩者の主張する所各一理あり今俄かに其是非を判ずべからずと雖とも、先づ左の三點に就き稍明確なる調査を遂げ得るに於ては蓋し本問題を解決することに於て困難ならざるべし。

一、柞蠶絲の輸入頓は幾許の程度まで增進すべきか、

二、紡績絹絲玉絲及生絲は柞蠶絲の輸入以來如何なる影響を受けたるや、

三、柞蠶は本邦に於て飼育するも收支相償はざるや、

●殺蛹乾繭に就て

大日本蠶絲會通常會員　馬場由

夫れ吾人の日夜寢食を忘れ倦厭の色なく老幼相助け蚕蠶に從事するは多數の良繭を收得せんとするに外ならず、然れども當に良繭を多收したりとて以て滿足すべきにあらず、彼の繭中には蛹の活存して一定の時期を經過せば直ちに蛾化脫出するか或は蠶蛆の穿つ處となりて良絲を製出すること能はず、數十日の辛勞と幾多の資本とを擧げて水泡に歸する底の損失を見るに至る豊警めざる可けんや、之れ實に殺蛹乾繭の必要なる所以なり、然れども此の二件たるや其方法及び技術の困難なるもの之れあるか爲か所論區々歸着する所を知らず、或は低溫長時の乾燥を可とし、或は殺蛹と乾繭とを區別するを好とし或は繭層を焦さゞれば黴腐を防ぎ難しとし、更に甚しきに至りては半乾燥のものを平列して天然の空氣乾燥に放任するを佳しとし喧々囂々たり、之を以て壯大なる殺蛹乾燥場を設立して斯業に從事するも良好なる成績を見ること能はずして繰絲の困難絲量の輕減を來たし終に經濟の權衡を失し製絲業を指示して以て危殆の業とするに至るものあり、嗚誤謬の甚しきものに非ずや、然るに從來蠶絲界に於て甲論乙駁歸着する所なかりし殺蛹乾繭に對して慨ぶべき顧音を得たり、曰く換氣を頻繁にして高溫知時に殺蛹乾繭するときは繭質を害せずして絲量多く品位を損傷せざるは勿論工費を節減すと、余亦此に見る所あり嘗て東京蠶業講習所研究科に在りて聊か研究をなせることあり、依て之れか一端を述べ以て當業者の參考に供せんとす。

一、試驗に供したる繭は東京蠶業講習所飼育の春蠶小石丸にして試驗區を四區に別て常區に付き繭壓弁重量百十匁殺蛹乾繭目的溫度は最高二百五十度二百度百七十度低溫百五十度とす

一、乾燥器の都合に依りA區D區は六月十八日C區は二十日B區は十九日に乾繭試驗に着手す

一、乾燥器は東京蠶業講習所設置の火力乾燥器に據る

殺蛹乾繭成績表

乾繭目的溫度	記號	生繭量 重量	生繭量 容量	生繭量 粒數	乾繭量 乾繭量	乾燥溫度 最高	乾燥溫度 最低	乾燥溫度 平均	乾燥時間 始	乾燥時間 終	乾燥時間 時間數	繭色	繭等級
二百五十度	A	一一〇匁	一号	二七八	三五匁	一六〇度	一三七度	二四七度	年月日 二、一〇	年月日 五、三〇	三時 三〇分	四	甲
二百度	B	一一〇	一	二七二	三五	一二〇	一〇三	一九七	二、一五	三、三七	六、一三	二	甲
百七十度	C	一一〇	一	二六七	三五	一八〇	一五八	一六五	二、四〇	一、一〇	八、五〇	一	甲
百五十度	D	一一〇	一	二六八	三四	一八〇	一五三	一三四	一五八	一、三〇	一三、三〇	三	甲

乾繭中天候及溫濕度觀測表

目標 月日	晴雨	風 方向	風 風力	室外平均 溫度	室外平均 濕度
六月十八日	雨	東南	一	六四度三	九三度〇
同　十九日	曇	同	一	六四、七	九三、七
同　二十日	晴	同	一	六五、〇	九〇、〇

製絲成績第一表

目標 / 種別	煮繭 溫度	煮繭 時數	煮繭 溫度	煮繭 時間	繰絲 溫度	繰絲 時間	製絲時間 煮繭員數	製絲時間 索緒員數	一分間の小枠回轉	一分間の切斷回數	落繭頻數	解舒
A	二〇六度	八分	二〇〇	三〇分	一五〇度	二一四分	二五二分	二	三〇〇	一二回	二三八	四
B	二〇五	六	二〇〇	一〇	一五〇	一三五	一五一	二	三〇〇	六	七〇	甲
C	二〇四	六	二〇〇	八	一五〇	一三八	一三二	二	三〇〇	四	四八	甲
D	二〇四	五	二〇〇	六	一五〇	一三〇	一四一	二	三〇〇	〇	五〇	甲

（備考）一、製絲器械は「ケンネル」廣式六口樣にして三口を使用せり小枠の周圍は一尺九寸七分とす
一、工女は始終同一人とし繭束を結ばしむ
一、染繭數は厚皮繭五紋薄皮繭は六紋とす

同　第二表

種別／目標	生絲量	繭量	繭數	繭重量	殘繭數	殘繭重量	屑物合計	小計	繭量	總計	原繭に對する減量
A	一一・六	一〇・八	二〇八	二〇			三・七六	一五・三六	一八・二	三三・七六	一二・四
B	一二・二	一三・二	一七〇	五〇・〇			三・五二	一五・七二	一九・〇	三四・七二	二・八
C	一二・〇	一七・〇	一七〇	一四			三・二六	一五・二六	一九・四	三四・六六	三・四
D	一一・四	一六・〇	一六〇	四	四	二・〇	三・五四	一四・九四	一九・六	三四・五四	三・六

同　第三表（對生絲拾匁）

種別／目標	製絲時間	絲	繭	屑	揚	蔟	殘	繭	合計	繭量
A	二・二秒	〇・九三匁	一・七八匁		五・一匁				三・二四匁	一五・九匁
B	一・三一	一・〇八	一・三五		四・〇				二・八九	一五・六
C	一・一七	一・一〇	一・四〇		二・〇				二・六八	一六・二
D	一・二九	一・四〇	一・四		〇・七				三・一一	一七・二

同　第四表（生絲檢査成績表）

種別／目標	色澤等數	纖度 最大	纖度 最小	纖度 平均	纖度 偏差	強力 最大	強力 最小	強力 平均	伸度 最長	伸度 最短	伸度 割合
A	4	一七・〇デニール	一六・〇デニール	一六・七		六二・〇グラム	五二・三グラム		一〇四		二・〇九
B	1	一七・〇	一五・五	一六・二					一二五		二・四九
C	2	一六・〇	一五・五	一五・八		五五	五四・〇		一一九		二・三七
D	3	一八・〇	一七・五	一七・八		六二	五五・七		一一五		二・三〇

（備考）
一、強力及び伸度を檢したる時の溫度は七十八度にして濕度は八十四度なり
一、纖度及類節は搖返の際各枠より檢尺器二百回つゝ五本を採り之れを檢して四百回に換算せしものなり
一、強力伸度は各纖度より五本つゝ都合二十五本を採り平均せしものなり
一、煮繭繰絲湯溫度及時間の如きは試驗項目の異なるにより夫に加減を取りたり

成績概評

一、A區及びB區のものは繭色鮮美にして煮湯迄も濁らず、解舒極めて容易にして索緒を缺すに當りてもA區D區の如くならず、只單に釣子の柄若くは箸を以て引き揚くれば足れりとす、故に生絲の品位大に揚り其由諸般の成績本試驗の第一位を占む。
一、D區のものは繭色及び解舒に於ては前者に異なるなきも、竹繰時間稍長きに亘りたるを以て繭體少しく黝色を帶び、其成績前者に次ぐ。
一、A區乾繭溫度は極端なるを以て繭層に微褐色を呈し、繭體は全然黝色に變じ從て煮湯を汚濁すること甚し、故に繰絲湯を屢々換せざる可からず、又其解舒は不良にして涌緒忙しく落繭多く索緒難なる使用すること八間に及び、製絲に於ても意外の長時間に渉りたるに依り生絲の光澤なく一見汚染繭絲の如く其成績概して不良なり。
一、乾繭溫度D區の成績不良なること A區に於けるものと同下

以上の成績を概括して論斷を下せば殺蛹乾繭は繰絲上に於ける絲量の多寡に直接の關係を有するものにして解舒の難易其主なるものなり、而して解舒の難易は實に乾繭熱度の適否に由るものの多し、何となれば生繭乾燥は理學の定則に從ひ溫度高さときは水分の蒸散旺盛にして乾燥時間を短縮するものなり、故に理化學的の變化を起すの餘殺なきを以て（A區を除く）解舒は極めて容易且つ絲色に絲量に將た類節に相及ぼす處の成績優等なり、之に反し溫度を低くし長時間を以て緩慢に水分を蒸發せしむれば、繭絲の外圍に存する絲膠は漸々溶解し、乾燥するに從て絲纖は上下左右に交互粘着し、其乾燥するに及んで

は全く凝結して繰絲の際解舒を惡くし、爲めに繰絲に困難を來すと共に幾多の損害を製絲家に及ぼすべし、故に殺蛹乾繭の適度は二百度乃至百七十度の範圍に在りと謂ふべし。

結　論

從來殺蛹乾繭法の不完全なるが爲に年々當業者の受けたる損害は鮮少ならず、今全國の收繭額を一ヶ年二百五十萬石として其内殺蛹乾繭の不完全により二割の損害あるものと假定せば、殆んど五十萬石は製絲用に供するを得ざる割合なり、今一石平均價五十圓と見積るも尚ほ二千五百萬圓の巨額は年々歲々不識不知の裡に當業者の被ひる損害なりとす是れ主として養蠶家が殺蛹乾繭の繁雜なる手數を要するを懶厭し生繭其儘販賣するの惡習を馴致し、其方法の良否を講究せざるに由れり、故に製絲家及び仲買人は相場の高低繭質の優劣を論せず、短期に買收せんとし道路の遠近を問はず、最急敏速に運送せんとするも、生繭其儘なれば如何に荷造法に注意するも汚損を免れず、又一時に多數の人員を雇傭して所要の原料を購入せんとするを以て多數の費金を支出せざるべからず、之本邦製絲家の絲價が相當の價格を有するにも拘らず生產費超過して算盤持てず遂に泣賣するとある所以なり、又從來絕て蛆を見ざる養蠶地にも生繭運送の結果蛆害の繁殖を來たし、收繭額を減するに至りしもの決して少なきに非ず、故に蠶絲業振興策として講ずべき最大急務は殺蛹乾繭事業を獨立の專業とし設置せしむるにあり、而して其方法は同一監督の下に市郡町村各一致協結し、完全なる殺蛹乾燥場を設け適當の乾燥を施し貯繭をなさば如何に不順の天候に遭遇するも黴生腐損の障害を受けずして其價格を貶落することなきは勿論、自己所望の時に於て相當に販賣することを得べく、製絲家も亦所要に應じ漸々購入して器械を敏活に運轉せば例へ絲價は今日の如く騰貴せざるも、其收利は今日よりも遙に勝れるものあり、而して斯業の面目を一新するに至るべし、果して然らば社會より見て以て危殆の業とせられし蠶絲業は有益確實の業と化し歡迎投資せらるゝは火を睹るよりも明瞭ならん、余は研究期日に制限あるを以て再三綿密の試驗に從事することを能はざりしは實に遺憾とする處なり、世の熱心家幸に此の殺蛹乾繭法の研究に意を致し、細大漏なく其發因結果を明にして成績を發表すると同時に、完全なる殺蛹乾燥器を發明し以て斯業の發達改善を謀らんことを切望するのみ。

●蠶の種類一定に就て

大日本蠶絲會
技術委員　理學博士　佐々木忠次郎

蠶の種類を一定し生絲の品質を精良にするは我蠶業界目下の急務最も必要にして最も有益なる問題なり、故に之を一定せしむるの方法に就ては吾人蠶業界に籍を置く者の一致協力して各方面より之を研究調査することは一日も忘る可からざるなり、惟ふに蠶の種類の一定は或る區域に限られ之を全般に及ぼすは實に困難なるのみならず、動もすれば一定區域内に於ても尚ほ能く之を決行することを能はざるやの感なしとせず。

余は明治三十年發行の大日本農會報に於て號を連ねて蠶の種類に就きて論述したることありき、爾來今日に至るまで此事に關し常に注意を怠らざりき。

さて蠶の俗に種類と稱する者は其分類の基礎一定せざるが故に何々の要點を種類の特性となすや甚だ分明ならずと雖も、兎に角其特性と見做す可き徵候は大略左の諸項ならんと信ず。

第一　一ヶ年中發生の回數を基礎とするもの

い　一化蠶（春蠶）
ろ　二化蠶（夏蠶）
は　三化蠶
に　四化蠶
ほ　多化蠶
へ　秋蠶（風穴種）

第二　繭色を基礎とするもの

い　白繭
ろ　黃繭
は　綠繭
に　淡青繭

第三　繭形を基礎とするもの

い　楕圓形にして絞れあるもの

ろ　楕圓形にして絞れなきもの
は　長楕圓形にして絞れあるもの
に　紡錘形なるもの
ほ　圓形なるもの
へ　不正形なるもの

第四　眠起の回數を基礎とするもの
い　四眠蠶（普通蠶）
ろ　三眠蠶

第五　異種蠶蛾の交接を基礎とするもの
い　掛合せ

第六　蠶兒の着色斑紋等を基礎とするもの
い　姫蠶
ろ　縞蠶
は　熊蠶
に　獅子蠶（蠶體の背面に痣を存ずるもの）
ほ　斑驢蠶（蠶體に手綱染に似たる斑紋を存するもの）

右の外尚ほ他に分類の基礎となるべきものありと雖も、錯雜を來たすの恐あるが故に省略することゝせり。

今や本邦に於て專ら飼育する一化蠶即春蠶のみにても其種類（變種と稱する方穩當なるべし）甚だ多しとす、然れども其變種の名稱は着色斑紋、繭の大小、其縮の如何を初めとし、或は其產地の名稱其他蠶種製造人名稱等より成る者少しとせず、故に春蠶の種類即變種は其數夥多なるが如くに見ゆるなり、然れども其類別の方法に至ては確たる基礎なければ多くは單に名稱を異にした

るに過ぎざるなり、試みに第五回內國勸業博覽會出品目錄第一部第六中記載せる長野縣出品の蠶種名を檢するに種類一定論ゐるの今日尚ほ參拾前後の種名あり、長野一縣の春蠶のみに於てすら斯くの如し、若し殘餘の諸縣に於ける春蠶種名を調査せば、其數は幾拾幾百なるや枚擧に遑あらざるべし、然れども目下世に稱賛せらるる春蠶種は假りに又昔、青熟、小石丸、白龍等と見做すも、此等四種の蠶繭は必す一種獨特の形狀大小品質を備ふるや疑なき能はず、是を以て右等蠶種の蠶繭より製出せる生絲は貿易上別々に之を取扱ひたる例を聞かず、或は云ふ某種は絲纖太くして某種は細く、某種は繭大にして某種は繭小なりと、然れども同一の種類にて飼育の方法如何に據りては絲纖太くもなり細くもなり、大形ともなり小形ともなるは青蠶に從事するもの、熟知するところなり、試みに青熟の蠶繭のみに就ても見よ其大なるものは甲に示したるが如くなるも、小なるものは乙圖に示したるが如きものありて、尚ほ此兩者の中間に在る大さの蠶繭は幾類あるかは推して知るべきなり、加之一種類の蠶兒にても其體の大小に依りて其吐出する絲纖に細太あるを免れざるとなれば殆ど蠶種確定に近き又昔、青熟、小石丸、白龍等の種類に於けるも、之を飼育するの方法を初めとなし其他百般の方面より絲纖の均一を計るに非ざれば、假令蠶種の名稱は一定することあるも、其絲纖、生絲の品質は一定を望む能はざるなちんと信ずるなり

余と同感の諸士は此重要問題に關して充分の研究實驗を累ねられ、蠶種及生絲の一定を計るの方法は那邊に伏在するものなるや之を攻究するの責任あり、余も亦進んで此研究に怠るなからんことを期す。

●農蠶の病原體研究

大日本蠶絲會技藝委員　農學士　宮原忠正
大日本蠶絲會通常會員　箭內武貞

右は宮原農學士及び箭內武貞兩氏が福島縣蠶業學校に於て研究せられ、特別報告として發刊せられたるものなるが、既に之を月餘前惠與せられたれども、紙數限あるの會報遺憾ながら掲載するを得ず、遲延以て今日に至れり、讀者の宏量之を恕せよ。

第一章　總論

膿蠱種は春蠱と夏秋蠱とを問はず稚蠱と壯蠱とを論せず、何れの時期に於ても發生する病にして、其性狡化病の如く劇烈ならずと雖も、之が爲に養蠱家の被むる損害年々尠しとせず、然るに本病の原因に就ては學者の說、所各相同しからず、從て豫防豫像防の法未だ明かならざるものあり、故に其病原を探究し驅除豫防の途を講ずるは刻下の急務なりと信ず。

從來本病に關し說をなしたるもの尠なからず、明治四年ハーベルランド氏は膿血の體液汚濁するは脂肪組織の分解によりて生ずる無數の小球血液中に浮游するが爲めにして其分解を起こす所以は蠱室內の過濕又は溫度の激變に由るならんと云ひ、（同氏養蠱書）明治八年ヨハン、ボルレー氏は蠱室內の空氣の欝滯過濕溫度の下降等を以て本病發生の媒介なりとし、（同氏蠱病論）明治十年エツリヨ、ヴエルソン氏は溫度の當を得ざること濕度高きこと及び密飼すること等は其重なる原因なるが如しと云ひ（同氏養蠱論）明治十八年ユーヂニ、マイヨー氏は膿蠱の體液中に認むる球體は脂肪組織及び空氣管膜の細胞に存すること多きを以て呼吸作用の如何に基づき產生するものなるべしとし不潔の空氣及び冷濕は其媒介たるべしと云へり、（同氏養蠱論）而して諸學者の說く所概ね此の如くにして未だ其病原を明かにするに足らざりき。

降りて明治二十七年佐々木博士は本病研究の成績を發表せられ、膿蠱の體液中に認むる多角體即ち假晶體は一種蛋白質の變形したるものにして其生する順序は最初細胞核の周圍に生じ、漸々增加して細胞內に充滿し遂に細胞膜破れて體液中に流出し血液に混するものなりとし、其之を生する原因は呼吸作用の不完全に職由するものとし、研究調査の次第を明示せられたり、之れ膿蠱に關する學術的研究の嚆矢なり、（同博士著膿蠱）其後クラシルユスツク氏は膿蠱の原因を細菌の寄生に依るとなし、之を發表せりと雖も內外學者の此說を首肯するものにあらず。

ルユスツク氏は更に進んで本病に就き攻究するところありて其病原を一種の原生動物の寄生に歸し明治三十一年其成績を公にせり、同氏の說に由れば彼の多角體なるものは分裂によりて繁殖するもの

にして鏡檢に際し往々長形をなして其大さ普通のものゝ二倍大に達するもの、或は中間に縊れ目を生するもの、或は縱斷して恰も双球狀をなすもの、又は稀には三球四球狀をなすもの等を認むるは即ち小體の分裂時代と見做すべきものにして、此の分裂せるもの漸次圓形となり、遂に五角形又は六角形の多角體となる、但し之れは時により規則正しく行はれざることあり、其分裂一定度に達せる小體よりは又恰かも油球の如き小粒體を產出す、其形小球狀にして大さ〇、〇〇一ミ、メ、前後なり、此の小粒體の出でたる小體即ち殘殼は數時間の後は萎縮して潰るゝに至る、又小粒體は漸次發育して大形となり一時アミーバ狀を呈するとあり然れとも運動性を欠くものゝ如し、其體內には不規則にして光輝ある顆粒あるを見る、此のもの後には楕圓形となり所謂包囊體となる、包囊內には漸次に胞子を形成し、最後に一囊內に數十粒の小體を充たすに至る、包囊の形は頗る大にして往往百分の五ミ、メ、以上に達し二重の包囊により包被せらるゝものなり、又囊內の小體成熟するときは其被膜裂開して小體を流出するに至る、此の小體は血液に混して各組織に移り養料を奪取して或は直ちに分裂繁殖をなし、或はアミーバ體を生じ更に小粒體を分生して盛に養料を攝取し前記の經過によりて繁殖するものなり、而して以上二樣の繁殖法中小粒體を生ずるものを以て本病原正式の繁殖法とし、分裂繁殖に依るものを以て變則なるものとせり、同氏は此寄生物を以て原生動物中胞子虫類の球虫目に屬するものとなせり。

ペルピアニー氏は亦た本病を以て一種の原生動物の寄生に依り發生するものとなし、多角體は一旦變じてアミーバ體となり、而して此アミーバ體より多數の多角體を生產するものとなせり。

大森博士は膿蠱の脂肪組織內に於て屢々アミーバ形をなす一種有機生體の寄生するを見、又其內容物一所に凝集して一個の多角形をなせるもの、或は其多角形の內容物中央より緊縛して將さに分裂せんとするもの、又は全く二個の多角形に分離せるものを見尙ほ四個の多角形を一被囊中に藏するものあるを見、彼の假晶體なるものはボルレー氏の唱へし如く原生動物の胞子にあらざるなきや、其脂肪組織內に

存在するアミーバ體は之より發生したるものにあらざるや暫く鄙見を豫報して今後の研究を俟つと云へり。（同博士著日本蠱病論）

膿蠱の病原を微生物の寄生に依るとし、從て傳染性を有するものなりとの說は近年漸く之を認むるもの多く、本年三月發行東京蠱業講習所蠱事報告第十九號所載の膿蠱試驗を見るも其傳染性を有することを明かにするを得べし、然れども以上述べたる所の外未だ其病原體たるべき微生物の性質を明かに示したるものあるを見ず、余等去る明治三十四年以來本病原の探究に從事し幸に其性狀の一般を知るを得たり即ち以下章を追ふて其大要を記述せんとす。

第二章　膿蠱の傳染試驗

膿蠱の傳染性を有するや否やを確かめんが爲め膿蠱より得たる膿汁を以て種々の試驗を行ひたり其成績左の如し。

第一　試驗　明治三十四年九月二十三日秋蠱種第四齡蠱

試驗頭數	膿蠱發生數	注射後發病迄の日數	摘要
膿汁注射 二〇	二〇	九	新鮮なる膿汁を蒸餾水にて稀釋し皮下注射を行ひたるものなり
加熱膿汁注射 二〇	—	—	攝氏百度にて三十分間熱せし膿汁を用ひて前者と同法を行ひたるものなり
蒸餾水注射 二〇	—	—	前者と同量の蒸餾水を注射したるものなり

第二　試驗　同　上　第五齡蠱

試驗頭數	膿蠱發生頭數	注射後發病迄の日數	摘要
膿汁注射 二五	二五	九	第一試驗に同ト
加煙膿汁注射 二一	—	—	同
傷所膿汁塗布 二五	二三	一〇	新鮮の膿汁を針頭に附着せしめ之を以て體皮を刺したるものなり
蛻皮の除膿汁塗布 二〇	—	—	蛻皮しつゝある蠶體に膿汁を塗布せるものなり
氣門膿汁塗布 一五	—	—	蛻皮後皮膚尚は硬化せざる蠶體の氣門に膿汁を塗布せるものなり

第三　試驗　明治三十五年五月春蠶種第四齡蠱

以上第一及び第二試驗の成績に依れば膿汁を注射するときは同病に罹ること明かにして、且つ極めて微量の膿汁を以てするも能く感染するものあることを知れり、而して膿汁を攝氏百度の熱に觸れしむと三十分間に及べば其傳染力を消失するを見る。

試驗月日	蠶齡	試驗頭數	膿蠱發生頭數	其他の病蠱數	繭蠶全數	注射後發病迄の日數
膿汁注射 五月二十三日	第四齡二日目	四五	二四	一六	四〇	八—一〇
加里にて處理せる膿汁注射 同	同	四五	三〇	二	三二	八—一〇
加里注射 同	同	—	—	—	—	—
膿汁注射 五月二十四日	第四齡三日目	一一	一〇	七	七	七—一〇
同 五月二十五日	第四齡四日目	一〇	八	八	八	七—八
同 五月二十六日	第四齡五日目	一一	一一	—	一一	七—一〇
同 五月二十七日	第四齡七日目	一一	七	—	七	八—一〇
膿汁を桑葉に塗抹して給與 三回	第四齡二日目	一八	九	—	九	八—一〇

右の試驗成績により膿汁を注射したるもの、又は桑葉に塗抹添喰せしめたるものは其時期の如何に係はらず能く感染するものなることを知れり、而して其病徵を呈するは早きは七日遲きも十日を過ぎざるを見る。

第四　試驗　明治三十五年六月四日春蠶種第五齡蠱

蠶齡 試驗頭數	齡中膿蠱發生頭數	上蔟中膿蠱發生頭數	繭蠶全數	摘要
加熱膿汁注射 第五齡二日目 二二	一二	—	一二	攝氏六十度にて十五分間熱したるものを用ひたり

同	同	一二	五	一〇	同しく三十分間熱したるものを用ひたり
同	同	一五		一一	攝氏七十度にて五分間熱したるものを用ひたり
強加里にて處理せる膿汁注射	同	一二		一一	
膿汁付着の針を皮膚に刺せしもの	同	一八	九	八	一七

此試驗に依れば攝氏七十度の熱に短時間觸れしめたる膿汁は尙ほ能く感染力を保てども、强苛性加里を以て處理すると一時間に及ぶときは全く其力を失ふものなることを見る。

以上諸種の試驗成績を按ずるときは膿汁は其新鮮なるものと雖も單に體面に塗付するのみにありては傳染することなきを證し、之を桑葉に塗抹して給與し或は注射接種を行ふときは極めて微量を用ゆるも能く感染して膿蠶を發生するものなることを知るを得べし。

此他白色ヴセリン、ピツツ油等を以て蠶兒の氣門の外口を閉塞し數回反覆之を試みたりと雖も遂に積極的成績を擧ぐること能はず、尙ほ空氣欠乏濕氣過剩蒸桑給與等の試驗を行ひたれども何れも膿蠶の發生を認めず、茲に於て平本病は一種微生體の寄生に依りて起こるものなることを推定し、更らに進んで病體内の組織に就き調査する所あり、遂に其病原體の經過を明かに認むるに至れり。

（未完）

●秋蠶飼育の奬勵に就て

大日本蠶絲會
特別會員　舘　三之吉

我蠶業界の一問題たる秋蠶飼育の利益に就ては既に鳥羽久吾氏の熱心なる意見を本會報に登載せられ、今更之に對て贅辯を費すの要なきが如きも、果して全君所說の如く有益無害の事業にして且多大の利益を獲收し得らるべき哉否やは尙一疑問に屬し大に講究すべきの價値あるを信ぜり、元來余輩も秋蠶飼育の奬勵には贊成を吝まざるの一人なれども、同氏の意見とは利害得失の點に於て相一致せざる者あり、依て其二三の要を摘記し以て意見の存する所を明にせんとす。

一、秋蠶飼育と桑樹との關係　秋蠶專用として栽培せらるゝ所の桑園は暫らく別問題として近時一般に行はれつゝある同一の桑園をして春秋二期に於て採收飼育するものとせば、其桑樹に及ぼす所の傷害は決して尠少ならざるは事實の明示する所にして假令同氏と雖も此一點に對しては些の異論もあらざるべし、然り而して同氏の所說は既收の利益を以て培養を努めなば決して桑樹を衰頽せしむる患なしと、此言机上の議論としては誠に可なりと雖も事の實際は之に相反するものの尠からず、余輩も今を去る十二三年以前は同意見を抱持し、此方針を以て大に奬勵し亦自作の桑園數町歩にも試みしに、彼の桑樹の生理上必要缺くべからざる葉を再三摘採せし結果は如何に滋養に豊富なる良肥を施すも其効極めて薄く、桑園は四五年を出ずして不治の難症たる萎縮病に罹り止むなく養蠶業を中止せざるを得ざる悲境に陷り悉く失敗に歸したり、（當時萎縮の病原を先輩諸氏に聞くに激烈なる傳染性を有する一種の黴菌なりとの說に、余輩も狐狸して一時數町歩の被害桑樹を除去せしことあり）、斯る不幸に陷りしは獨り余輩のみにあらずして同業者中此轍を踏みしもの亦尠からずとなす、而して余輩は當時萎縮病實地調査の目的を以て重なる蠶業地を踏査せしことありしに、福島縣下の如きは甚だ稀にして僅に田村郡三春町附近の桑園中現今は三四分通りも該病に罹りたるものあり、依て栽桑者に其原因を質問するに孰れも近年秋蠶の流行せし結果なりと言ふ、此一例を以て推すも秋蠶飼育の桑樹に與ふる傷害の如何に多大なる乎を證するに足るべし、殊に萎縮病原も學說上生理的作用に因り發生するものと確定せるを見れば、秋蠶飼育即ち再三桑葉を摘採するの有害なることは覆ふべからざる事實となれり。

二、蠶種の撰擇及び運搬上の注意　土地の甲乙に論なく凡蠶兒を飼養せらるべき所は何地に於ても製造し得らるゝ春蠶種と雖も、健全無毒の良種を得んには多少困難なるあり、況んや製造地に限りある秋蠶種にありては一層容易ならざるを常とす、又運搬の如きも春蠶種とは異り、炎熱の候に於て急送すべきものにして些々たる注意と雖も之を怠るときは途中に於て忽ち生理を害し不慮の失敗を招くことあり、是れ春蠶種に比し一段の注意を要すべき點なりとす。

三、飼育の難易及び繭質の優劣　育蠶の方法は鳥羽氏所說の如く健全無毒の良種を得て注意周到なるに於ては敢て難きにあらずと雖も、短日數間に一生の發育を遂ぐるを以て春蠶に比し多少の困難なるは免れざるべし、殊に秋蠶飼育の秘訣とも言ふべきは常に柔軟なる桑葉を撰み、新鮮なるものを多量に而も須臾に殆んと晝夜の別なく給桑し併て除沙を怠らざること是なり、故に桑樹の安全を圖らんと欲せば從て滿足なる結果は得難きものと見て大過なかるべし。

秋蠶繭の春蠶繭に比し品位の劣等なるは既に蠶業講習所の試驗成績あり、尚且つ我蠶業界の輿論あり今爰に贅せず、併しながら春蠶中の劣等なるものと秋蠶中の優等なるものと比較對照せば或は春蠶繭にして劣るものなきにあらず。

以上の三項目に就き論究するときは鳥羽氏の所說と正反なるもの頗る多く、秋蠶なるものは到底奬勵するの必要なきものゝ如し、然りと雖も余輩の尚之を奬勵せんとするは即ち左の目的に外ならず。

元來秋蠶飼育は有益の事業とするも、春蠶の如く、南は臺灣より北は千嶋の端て迄も廣く奬勵すべきものは臺灣より北は千嶋の端て迄も廣く奬勵すべきもの にあらず、須く地形及び氣候等の關係を査察し果して適地なりと認定せば大に奬勵すべきものなりと信ぜり、北適地とは彼の東北地方に在る地形上山岳重疊し、春期は雲霧常に近隣を掩ひ、氣候冷濕にして比較的蠶兒の發育不良の地を以て最適とす、斯る土地より產する秋蠶繭は比較的品質良好なるを以て寧春蠶を廢して代ふるに秋蠶を以てせば却て得策なら ん亦之に惑ふ者は歲々晩霜の害を被むり、春蠶の利を獲收し能はざる所とす。

如上の適地と雖も秋蠶飼育に供用する所の桑園はなるべく專用的に栽培することを切望する者なり、若し之を現時の如く等閑に付し、同一の桑園より再三收葉するものとせば、秋蠶飼育の流行に必しも隨伴すべきものは最も恐るべき萎縮病たることを覺悟せざるべからず、彼の數十年を經るも依然として勢力の毫も變へざる本縣阿武隈川沿岸の桑園も、數年を出ずして萎縮の難症に罹り、遂に回復の途なきに至るべし、同業諸氏深く思を茲に致されんことを切に冀望して止まざるなり。

●青森外五縣蠶絲業視察談（承前）

大日本蠶絲會技師委員　農學士　中村　彥

第七、長野縣蠶絲業一般

一、施設事項

縣の施設

縣立小縣蠶業學校

蠶種同業組合聯合會補助（聯合會は補助費を各蠶種同業組合に分配し蠶種々類名稱調査、蠻蛆驅除、蠶病消毒の實行に勉めしむ）

二、蠶絲統計

年次	桑畑收穫	蠶種製造	普通製生絲
種類	桑畑收穫	蠶種製造	普通製生絲
三十一年	三、七、七、三、一反	三、八、三、三、一枚	三、六、六、六、一貫
三十一年	三、六、六、三、〇	三、三、六、六、〇	三、〇、〇、九、三
三十一年	三、七、六、〇	三、七、三、三、〇	一、六、〇、〇、〇
三十二年	三、四、一、七	四、三、六、六	一、六、三、〇、四
三十三年	三、九、五、五	六、三、六、六	一、六、三、〇、四
三十四年	三、九、五、五	四、四、六、四	三、〇、六、三、一

三、桑畑

柔樹仕立方は大概根刈にして上下兩伊那郡及山田郡に點々刈桑あり、本縣管內に入り汽車沿道の桑畑を一見したるものは桑樹の丈低くして枝細く葉の小さきに一驚を喫するなるべし、聞く處に依れば今を去ること二十四五年前に在りては桑樹の發育良好なりしが桑畑中に耕作者の直立するものあるも容易に其所在を判し難かりしと、而して今や縣下を通じ其の丈三尺に滿たざるもの大部分を占め、遠くより之を望むときは桑樹にあらざるやの感を惹起するの狀況

なり、其原因は言ふ迄も無く夏秋蠶飼育の漸次增加せる爲桑葉の摘採酷だしきに據るもの如し。

現況如斯なるを以て注意周到なる養蠶家は桑樹使用上利害の點に着眼し、製絲家も產繭の絲量數年前に比し著しく減少し製絲上不得策なることを覺知するものあるに至り、近年は桑畑所有者にして秋蠶用桑葉を販賣するものは春蠶用と共にするの習慣となれり、何となれば單に秋蠶用として販賣するときは葉を摘採するに際し不注意の芽と共に搖き取り、翌春に於ける桑樹の發育不良なること實に甚だしきものあれはなり。

桑樹の種類は四ッ目、鼠返し、元右衛門等にして夏秋蠶の盛に行はるゝ東筑摩郡に於て廣く栽植せらるゝは大葉即ち小牧なり此種類は普通八十八夜前後に其幹を伐採し以て霜害を豫防す。

萎縮病は今回視察せし六縣中最も劇しかるべく思はる、特に長野市より上高井郡須坂町に至る間桑畑の慘狀を見て覺えず肌に粟を生じたり。

野生桑を使用する地方は北安曇及南筑摩の兩郡なり。

四、養　蠶

今縣下一市十六郡を春夏秋蠶の蠶種掃立枚數に依り順次列記すれは左の如し。

順位	春蠶	夏蠶	秋蠶	順位	春蠶	夏蠶	秋蠶
第一	小縣	東筑摩	東筑摩	第二	下伊那	上伊那	上水內
第三	更級	諏訪	更級	第四	上伊那	南安曇	上水內
第五	南佐久	小縣	南安曇	第六	上水內	下伊那	埴科
第七	埴科	北佐久	上高井	第八	上高井	南佐久	下伊那
第九	北佐久	下高井	諏訪	第十	下高井	西筑摩	下高井
第十一	諏訪	北安曇	上伊那	第十二	西筑摩	上水內	北安曇
第十三	北安曇	上高井	北佐久	第十四	東筑摩	埴科	西筑摩
第十五	下水內	更級	南佐久	第十六	南安曇	下水內	下水內
第十七	長野市	長野市	長野市				

前表に據れば春蠶は小縣、夏蠶は東筑摩、秋蠶は東筑摩小縣共に掃立枚數の夥多なるを知るべし。

更に各郡市の面積を見るに下伊那最も廣く、西筑摩、上伊那、北安曇、南佐久、小縣、下高井、東筑摩、南安曇、上水內、諏訪、北佐久、上高井、更級、下水內、埴科、長野之れに順次す。

去れは地積より觀るときは縣下第一の養蠶地としては埴科郡を推さいるべからず、同郡は面積九方里に過ぎされとも專業農戶數五千八百三十六、養業農戶數二千五百七十六、人口願る稠密にして春蠶飼育戶數六千三百六十三其掃立枚數一萬五千七百四十一、夏蠶飼育戶數千四百三十七其掃立枚數三千二百十四、秋蠶飼育戶數五千五百十二其掃立枚數一萬四千二百二十なり以て春、秋蠶の飼育隆盛を極むるを察知し得べし。

今夏秋蠶掃立、上族及發蛾時期の一例を示せは左の如し、但し諏訪郡に於ける調査なり。

夏蠶（二化性）第一期　掃立時期　最盛期　最終期　五月上旬　五月下旬

同　第二期　掃立時期　最盛期　最終期　七月上旬　七月中旬　七月下旬

秋蠶（二化性）第一期　掃立時期　最盛期　最終期　六月上旬　六月下旬　七月中旬

同　第二期　掃立時期　最盛期　最終期　八月上旬　八月中旬　八月下旬

夏蠶	第一期	掃立	五月十五日	
		上族	六月二十日	
		發蛾	七月五日	
	第二期	掃立	七月十五日	
		上族	八月十一日	
		發蛾	八月二十四日	
秋蠶	第一期	掃立	六月二十五日	
		上族	七月二十三日	
		發蛾	八月七日	
	第二期	掃立	八月十五日	
		上族	九月二十一日	
		發蛾	十月十五日	

蠶種は一化性にありては又昔、中巢最も多く小石丸、大又、白龍之れに次き二化性第二化にありては白龍最も多く中巢吉熟之に次ぐ本縣か蠶種製造額に於て本邦第一なるとは世人の熟知する所なるか小縣郡鹽尻村の如きは原種一化性約一萬二千枚、東筑摩郡本郷村の如きは原種二化性第一化約三千八百枚同第二化八千五百枚を製造す實に盛なりと云ふべし。

風穴　縣下風穴の數二十有餘あり就中最も有名なる南安曇郡安曇村大字稻扱の風穴とす、同風穴內氣象は松本測候所に於て調査報告せるものあり風穴を利用せんと企圖するものゝ好參考書たるへし。

六、生　絲

本縣に於ける器械生絲の產額は三十六萬五千貫にして座繰生絲は僅に二萬七千貫に過きす、即ち前者の百に對し後者八に達せさるなり、以て器械製絲業の如何に隆盛なるやを知るに足るへし、而して器械生絲の產額を郡別に就き調査するに諏訪郡の如きは殆んと全縣下器械生絲產額の半を生產するを知る、左に器械生絲二萬貫以上の郡名を擧く。

郡名	器械生絲産額
諏訪郡	一四六、二七八
東筑摩郡	三五、三二七
上伊那郡	二八、九八六
上高井郡	二四、六六八
下伊那郡	二二、七一九
埴科郡	二二、二九一

即ち知る諏訪郡一郡の器械生絲産額は本邦に於て長野縣に次ぎ器械生絲産額の多き岐阜縣の夫に約倍し東筑摩郡は靜岡縣、上伊那郡は靜岡縣上高井郡は京都府、下伊那郡及埴科郡は埼玉縣の器械生絲産額に畧ぼ相同しきことを。

對外貿易の均衡を保持し國勢を維持すると稱する生絲にして其生産地の分配狀況如斯偏頗のものあるは果して喜ぶべき現象なるか。

（諏訪郡製絲業）同郡製絲業の沿革を開くに寛政初年「ノボセ」と稱し初めて手引提絲を製し、西陣及岐阜等に販出せり、降て安政六年に至り平野村林善左衛門なるもの此絲を横濱に輸出し海外の販路開けたり、其製絲は繰砌造にして百斤に付「ドル」幾個天保幾個と云ふ實相方なりしと云ふ、斯くて同村林源次郎、清水久左衛門等上州伊勢崎より座繰器械を持ち歸り、大に郡内に行はれたり、明治六年京都の豪商小野善助諏訪郡上諏訪深谷、上伊那郡赤穗、下高井郡中野の三ヶ所に百人繰の器械製絲場を建設せり、是即ち本郡器械製絲の創始なり同七年小野組破産し同時に製絲場も休業し工女一時全郡に離散せり。

同八年平野村武居代治郎等（中山社後平野社と稱す）現今の操工社を組織し、上州富岡工場を摸し製絲器械を設置す、同九年に至り下諏訪村に白鶴社、上諏訪村に鷺湖社、同十年宮下村に山本社（後公信社と稱す）平野村に開明社皇運社（後矢嶋社と稱す）等の數社組織せられ、十二年開明社々員改良陶器鍋を案出し、爾來光澤良好なる生絲を製造するに至り、十四年白鶴社に於て繰返法を設け精密の審査をなし製絲の精粗を均一ならしめしより、價格大に增進せり、而して十五年以前は佛國七分米國向三分を製出し、同十六年より過半米國向に變じたり、十七年開明社揚返場を建設せしより各社共に之れに倣ひ品位の改良を圖り海外に聲價を博し、釜數漸次增加し二十七年に至り一萬三千に達し爾後小製絲場は大製絲場に合併するの狀況を呈し、目下釜數約一萬六百生絲産額十五萬貫、工男女の數一萬一千五百名あり、工女は土地のもの三四割を占め、両伊那郡、東筑摩郡のもの之れに順次し、飛彈、山梨、越中、越前等よりも來るもの鮮なからず、繭は消費高の七八割は他郡他縣産にして上州、武州産も多く、東筑摩、南北佐久、小縣等之れに次く、交通不便なるを以て運搬の困難なる實に名狀すべからざるものあり、而して諏訪郡の製絲工場の天龍川沿岸に多きは只に水力利用の便あるに止まらずして、水質良好なると、繭の貯藏に適するが爲同一品質の繭にても同地に貯藏したるものは絲量を見ること多きに因るなり、

本郡に於て製絲工場の興廢甚だしき事實は左表に依り之を知るを得べし。

三十四年六月二十日現在		三十五年六月二十日現在	
工場數	釜數	工場數	釜數
一四四	一〇、四四〇	一三五	一〇、三三五

前表の如く工場に增減ある所以のものは二十内外の釜數を有する小製絲家の少なからざるに原因すと云ふ。

（上高井郡製絲業）同郡須坂町は流水に富み水力能く利用せられ、縣下屈指の生絲製造地なり、同地方の俗謠に

絲の名所は須坂に諏訪よ次は松代（埴科郡）飯田町（下伊那郡）遠く向きます亞米利加へ

同町に於て二大製絲場と稱せらるゝは東行社及後明社なり、東行社は明治九年内務省に於て設立を認可せられたるものにして同十八年社員中數名退社するや者あり此等の者別に一社を創立すと之を後明社と稱す東行社々員は二十九名、後明社々員は二十三名にして何れも製絲工場主たり、両社の事業は略同じく何れも自ら産る製絲をなさずして社員の製絲を小枠にて集め、之れを揚返し品位を檢し等級を附し一定の束裝を爲して社名を用ひ横濱に輸出し、其代金中より社費を控除し其他を先きに本社へ生絲を輸送せる社員に分配するにあり、目下両社々員の使用する工女數及両社が揚返場に使用する工女數は左の如し、工女は長野縣新潟縣のもの多數を占む因に記す須坂町に於ける製絲工女の數は合計約四千六百名の多きに達すと云ふ。

	名	工	女	數	揚返場工女數
東社	社	一、八七九人			一、一九
後明社	社	一、九二五			一三九

今東行社に於ける社費の支辨法及生絲產額等を聞くに横濱に出荷の際一梱に付五百圓內外の爲替金を受入れ、其中より成規費（成規費とは明治九年の認可より五月下旬に至る、而して此期日以外に休業する規約中に用ゐたる名にして今尙襲稱す）拾五圓を引去り、殘餘を荷主に交附す、此成規費は一梱に對する假定費用にして一ヶ年の終りに會社の總經費を算し之を總ての成規費中より控除し、剩餘は出荷額に應じ社員へ割戻すなり、一梱に對する社費は六圓五十錢乃至七圓に過ぎず、一ヶ年間横濱へ輸出する梱數は毎年千五百梱（一梱は平均十一貫五百目あり）前後にして三十四年六月より本年五月迄の產出高は千四百五十梱此斤量十一萬六百十五斤なりと云ふ。就業期日は大概七月一日より一月二十日及三月上旬より五月下旬に至る、而して此期日以外に休業する所以のものは舊年末の計算月なると、寒氣烈しきこと、養蠶期節及新繭の供給未だ無きとに依るなり、繭は先づ伊豆國より供給やられ次に群馬縣新町、埼玉縣本庄町、千葉、茨城、新潟等より輸入せられ、同地方に薪炭不廉なる爲製絲場に於ては多く重油を使用す（未完）

●雜錄 (Essais et faits divers) (Miscellaneous)

●風穴調査

蠶業家の經濟として積に膨脹せしむること、即ち年一回の大養蠶をなすの不得策にして經に膨脹せしむること、即ち年數回の小養蠶住家、人手、所持の桑園に相應するこなすの有益なることは、既に識者の是認する所なり、而して夏秋の養蠶かなすに飲き、必要條件は總全なる蠶種を求むるにあり、夏秋蠶種な製造するの法種々ありと雖も、多くは風穴の力な借らざるべからず、此に於て乎拔に風穴の調査を記載し、當業者の參考に資せんとす、風穴の所持者及び管理者諸君は左の例により通報あらんことを希望す、一位置、二經歷、三管理者或は所持者の姓名（會社組織なれば會社名）四貯藏し得べき蠶種枚數、五風穴內貯藏期中の湿度、六蠶種貯藏料、

一位置　十三、楠口風穴

甲府市を距るること東北約四里半餘防村楠口山大字柝無城小字石膳山にあり南方遙に富岳の皚々たるを見るべく甲府平原は一眸の間に在り其間を笛吹川、重川、日川等長蛇の蜒蜿たる如く西に向て流れ近くは鹽山、差出、等の勝景を眼下に望むべし爰に至るには中央東線にて鹽山停車場に下車すべし鹽山より楠口迄約壹里腕車を通ずることを得

二經歷　石膳山は御料地にして巖石の間より冷風を吹出すを發見せしを以て之を拜借し明治二十二年九月十六日蠶種貯藏の目的を以て搆造に着手し十二月二十三日工事落成す、又明治三十四年八月其傍に新風穴を增築し最も早出しの蠶種を之れに貯藏することゝなせり

今明治二十二年度より本年度迄貯藏せし蠶種枚數を擧ぐれば左の如し

年度	貯藏蠶種數	年度	貯藏蠶種數
二二	一六〇枚	二四	八、五五〇
二三	四、〇〇〇	二五	九、〇五〇
二四	三〇	二六	九、五〇〇
二五	三一	二七	一七、八一〇
二六	三二	二八	一五、〇二〇
二七	三三	二九	一〇、〇六〇
二八	三四	三〇	九、〇七〇
二九	三五	三一	一〇、一八〇
三〇	三六	三二	一〇、三〇〇
三一	九、三〇一	三三	八、九五〇

三所有者　若月八十八外五人の共有にて會社を組織し共盛社と云ふ

四貯藏し得べき蠶種枚數　三萬枚

五風穴內貯藏期中の湿度　大寒の候華氏二十一度八十八夜頃三十度夏土用入頃四十二三度土用半ば頃四十八度土用明け頃四十六度

六蠶種貯藏料　壹枚金五錢、壹箱（八十枚入）貳圓八拾錢、三箱以上は金貳圓五拾錢の割（會員川合菊次郎氏報）

●養蠶製絲器具機械の特許發明

（農商務省特許局調査）

養蠶用具に屬する本邦人の特許發明は其數百十四個

にして之を大別して養蠶網、蠶蛾貯藏器、上蔟器、桑扱器、給桑器、桑刻器の六種となすを得

一養蠶網　養蠶網の良好なる特徴を擧ぐれば左の如し

一網目の均一なること
二持運便利にして而も安全なること
三蠶兒の發育大小に從て網目を變更し得べきこと
四網目及網の裏表柔軟にして平滑なること
五空氣の流通を眞好ならしむること
六最も靜穩に最も强固に運動せしむる裝置あること

養蠶網の特許發明にして以上の條項を悉く具備せるものなしと雖も各特長を有せざるものなし特許第一一五八號明治二十四年四月二十九日特許　特許證主　日野重久　蠶下蠶網は第一項及び第四項に特許第一八三四號明治二十六年二月十七日特許　特許證主　横井市太郎　特許第二五四〇號明治二十六年二月十六日特許　特許證主　今井岩之助　養蠶網特許第五八年五月十六日特許證主　今井岩之助は特に第五項第六項に特許第四二一一九號明治三十年九月四日特許　藤井藤松　養蠶網特許は第一項第二項第五項第六項に特許第四七三八號明治三十四年六月十二日特許　下條網の特許證主　増井幾治郎は第一項第二項に適すべく各改良を施したるものなり（未完）

●明治三十四年度蠶種檢査成蹟の梗概（承前）

以上成蹟の示す處を通觀し之れを既往に於ける蠶種檢査成蹟に對照比較せば增減の大勢は自ら窺知するに難からず然れども從來の蠶種檢査は越年種のみに止まり本年度よりは蠶種檢査法改正の結果として不越年種も檢査を行ひ之れと同時に春夏秋蠶の季節的種別を廢し化性化期なる性質的分類に依ることゝなせるを以て其間自ら揆を一にせざるものあり故に相互對照し來りて直に進否を判斷するは正鵠を失するの嫌あれども所謂春蠶と稱せしものは本年度に於ける一化性と殆んど相等しきを以て試みに之れを比較すべし（△印は減）

年度	蠶種製造者數	原種掃立蛾數	蠶生産額	蠶種製造者一人に對する掃立蛾數	蠶種製造者一人に對する收繭額	原種百蛾に對する收繭額
三十一年度	一六七人	六六六、六六〇蛾	四〇、六六〇、八六六	三、九八	二、四〇五	六、〇五
三十二年度	一六四人	六六四、三六六	四〇、二〇〇、〇二一	三、九〇	二、四〇五	六、〇五
三十三年度	一七三人	七三六、七三〇	四、三四、八四四	二、五〇	二、四〇五	六、〇五
三十四年度	一七八人	七八六、〇二五	四、六四〇、三三	二、五〇	二、四〇五	六、〇五
同　歩合	△一、八八	△一、二〇〇、〇〇五	△〇、〇〇〇、〇〇〇	△〇、〇〇	〇、〇〇〇	〇、〇〇〇

年度	蠶種製造原種掃立蛾數	蠶生産額	計	百分比例 無毒	百分比例 有毒
三十一年度	六六六、六六〇蛾	四〇、六六〇、八六六	二三、九七二、四九七蛾	七九	二一
三十二年度	六六四、三六六	四〇、二〇〇、〇二一	二二、二四二、五六八	八二	一八
三十三年度	七三六、七三〇	四、三四、八四四	二、七、五三〇、四九一	八二	一八
三十四年度	七八六、〇二五	四、六四〇、三三	三、七〇九、三六三	八八	一二
同　歩合	△一、八八六、六六〇	△三五、五六六、五三三	△一、三五	△〇、七三	△六

年度	蠶種製造原種掃立蛾數	蠶生産額	蠶種製造者一人に對する掃立蛾數	蠶種製造者一人に對する收繭額	原種百蛾に對する收繭額
三十一年度	六六六、六六〇蛾	四〇、六六〇、八六六	三、九八	二、四〇五	六、〇五
三十二年度	六六四、三六六	四〇、二〇〇、〇二一	三、九〇	二、四〇五	六、〇五
三十三年度	七三六、七三〇	四、三四、八四四	二、五〇	二、四〇五	六、〇五
三十四年度	七八六、〇二五	四、六四〇、三三	二、五〇	二、四〇五	六、〇五
同　歩合	△一、八八六、六六〇	△三五、五六六、五三三	△一、三五	△〇、七三	△六

年度	原種合格	不合格	其他	計
三十一年度	一五、七五一、六〇八蛾	四、一二〇、四〇三蛾	七〇〇、四八六蛾	二〇、五七二、四九七蛾
三十二年度	一六、九五一、二七九	三、七四一、四二二	五四九、八六七	二一、二四二、五六八
三十三年度	二二、一一八、二八四	四、九〇七、六二三	五〇四、五八〇	二、七、五三〇、四九一
三十四年度	二六、九六九、七九八	三、七八〇、七〇二	四八九、三五四	三一、二三九、八五四
前年度對照增減高	四、八五一、五一四	△一、一二六、九二二	△一、五二三	△三、七〇九、三六三
同　歩合	二、一九	△二、二九	△〇、三〇	△一、三五

前年度對照增減高	原種合格	不合格	其他	計
同　歩合	△一、九八	△〇、九八	△〇、八六	△一、二〇

年度	種蠶合格	其他	計
三十一年度	三、六六六、六六〇蛾	一、七六六、六三四蛾	五、四三二、六六六蛾
三十二年度	三、六四六、三六六	一、七〇三、三六六	五、三四九、六三二
三十三年度	三、七三六、七三〇	一、七〇七、六二三	五、四四三、三五三
三十四年度	三、七八六、〇二五	一、七〇八、〇二一	五、四八七、〇四六
前年度對照增減高	△一、一二〇、〇〇五	△一、一一一、〇二一	△二、二三一、〇二六
同　歩合	△〇、〇〇	△〇、〇〇	△〇、〇〇

年度	製絲用種合格	不合格	計
三十一年度	二、六六六、六六〇枚	二、六六六、六六〇枚	五、三三二、三二〇枚
三十二年度	二、六四六、三六六	二、六四六、三六六	五、二九二、七三二
三十三年度	二、七三六、七三〇	二、七三六、七三〇	五、四七二、四六〇
三十四年度	二、七八六、〇二五	二、七八六、〇二五	五、五七二、〇五〇
同　歩合	〇、〇〇	〇、〇〇	〇、〇〇

之れに由りて是を觀れば蠶種製造者の數は前年に對し一割五分を減少せしも掃立蛾數は八分六厘の增加にして蠶種製造者一人に對せば實に二割九分の增進をなせる割合にして收繭額も亦之に隨伴せり是れ前年來同樣の現象にして小規模の蠶種製造者漸次減少し大規模の蠶種製造者之れに代りたるに因るならん

而して合格種繭の量は僅に減少せりと雖も合格製種高は却て增加し製絲用蠶種は八分二厘を示し原種は更に一層の增加をなして二割一分九厘を示せり之れ病毒歩合の減退と其他の磨擦に屬すべきもの尠少なりしに歸因せずんばあらざるなり

◉統計 (Statistique) (Statistics)

三十六年六月中生絲類及絹物類輸出入前年對照表（大日本外國貿易月表に據る）

種目	三十六年六月分 數量	三十六年六月分 價格	三十五年六月分 數量	三十五年六月分 價格	三十六年一月以降累計 數量	三十六年一月以降累計 價格	三十五年一月以降累計 數量	三十五年一月以降累計 價格
輸出								
生絲	一〇九八四斤	一二一九二四圓	三三七五斤	三三七五圓	三七〇七七八斤	三七四四三三六三圓	三八一〇七七斤	三七四四三三六三圓
機械製（一寸ニ付一二〇ヨリ一四〇デニ）	八三九九	八三四一〇一七			七七三九三八八	七七三九三八八	八三七四八	八三七四八
同上絲（一寸ニ付一四〇デニ上）	一〇一四四	一〇四四七六八四	一六四〇	一六四〇	一〇四四〇	一〇四四〇	一〇一七九	一〇一七九
其他								
製糸絲	七八四斤	八三六二〇	六八四	六八四	九六六六〇	九六六六〇	一〇九八	一〇九八
屑絲	一六九六九九	一六九六九九	一四四七七	一四四七七	一六四四〇〇	一六四四〇〇	一四四七七	一四四七七
繭	八六	一二三四四	一四	一四	三三六九	三三六九	一四	一四
羽二重	一三九九四四	三〇〇四四八八	三三七五	三三七五	一四四九四四	三三七四四三一六	一四四九四四	三三七四四三一六
平織	一四九九四四	三〇〇一三九九	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七
紋織及綾織	一四〇〇	一八三四四〇一九	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七
甲斐絹	三三八六六	七三〇六六一六四	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七
他の諸絹布（綿入とも）	一三九九	三三七二一八六	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七
絹製手巾	一〇〇六六三	三三四三六六四	一〇六〇三	一〇六〇三	一〇六〇三	一〇六〇三	一〇六〇三	一〇六〇三
刺繍絹布	一三八五六	一三六四四八四	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七
其他諸絹製品	一三六四四八四	三六六三八六六一六	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七
計			三三七五	三三七五	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七
輸入								
繭	一三四九斤	一八三〇七圓	一八三〇	一八三〇	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七
生絲	一〇七三	三六四三二四	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七
柞蠶絲	一〇七三	三六四三二四	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七
絹織絲	一〇七三	三六四三二四	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七
縮緬	一四七三	三六四三二四	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七
絹紬	一四七三	三六四三二四	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七
繭子	一四七三	三六四三二四	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七
絹紬織子	一四七三	三六四三二四	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七
絹綿天鵞絨	一四七三	三六四三二四	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七
其他諸絹布	一四七三	三六四三二四	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七	一四四七七

其他諸組製品					
計	六、六六六、六三	一五、一六九、六四〇	九、二〇四、〇四〇	一二、九一六、八四〇	

（參照）　三十六年輸出入品價額連月比較表

月次	輸出	輸入	合計	輸出に比し輸入は増	輸出に比し輸入は減
一月	一〇、四四六、二四四圓	一四、九六〇、三六三圓	二四、四〇六、六〇七圓	四、一〇四、一一七圓	
二月	一八、八八八、九五五圓	一四、一九七、五三一圓	三二、〇八六、四八六圓	五、三〇九、七三八圓	
三月	二一、二九六、八四五圓	一四、一九七、〇六六圓	三五、四九六、九一一圓	一、九九七、三三七圓	
四月	二四、四六二、七三二圓	一三、〇九六、二〇四圓	三七、五五八、九三六圓	一一、三六六、五三二圓	
五月	二三、三四四、三五七圓	一六、六五四、四七九圓	三九、九九八、八三六圓	六、六八〇、八五八圓	
六月	二〇、六六三、二五二圓	一四、九八〇、八七九圓	三五、六四四、一三一圓	五、一〇三、〇九六圓	
通計	二三、九八八、八七五、六五圓	一六、九六〇、八七一、四〇圓	三九、一、九七五、五四六、一五圓	四〇、一三〇、〇九六、〇八九圓	

備考　昨三十五年六月中は輸出千六百五萬千二拾九圓八錢　輸入二千百二萬五千九百五圓五拾七錢にして輸入超過四百九拾七萬四千八百七拾六圓四拾九錢なり

● 問答（Questions et réponses）（Question Box）

●接木の期節に就き質問

高知縣長岡郡大津村　大日本蠶絲會員　山崎萬壽治

總て植物の接木は晩冬又は初春に於て嫩芽の未だ開綻せざる前に行ふを普通とす然るに某學士は芽接法は夏土用後一週間內則ち八月二十日前後を以て良しとすと云へり果して然りとせば同期節に於て新梢を以て接木するときは如何なる理由により接着せざる哉御明教を乞ふ

答　大日本蠶絲會技藝委員　農學士　宮原忠正

接木術によりて植物を嫁接し其能く活着する所以は接穗の組織と砧木の組織と互に癒着して同一體となるのみならず共同の生理作用を營みて相互に補働し其生活をなし得る場合にあるものにして之を行ふに適當の時期は接木法と植物の種類並に之を行ふ土地の氣候によりて異なるものなり然るに截接法は概して晩冬より初春の間に行ふを宜しとす其理由は氣候尚ほ寒冷にして植物の生理作用遲緩し殊に落葉樹にありては殆んと其作用休止中に屬するを以て樹體を切傷するも爲めに病的變化を生すること少なく春暖に及びて樹液の循環を始むるに至り平癒層を生じ之と同時に接穗及び砧木の體中に於ける生理作用亢進し其互に補働して共同の生理作用を營み得るに至り始めて健全の發育をなし得るなり又芽接は春季に嫁接するも其接芽の發育せんとするとき貯藏養分の供給なく平癒層を生して共同の生理作用を營み得る迄其芽の生活力を維持すること難きと平癒層を生するも砧木の樹液循環の度と接芽の之を消費する度と適合すること難くして種弱なる平癒層分離する等により活着すること難しとす然るに芽接を夏季末に行ふときは接芽は休眠中なるを以て生理作用を營むことなく砧木は養分蓄積期なるを以て樹液能く循環し直に平癒層を生じ其平癒層は冬季を經過せんとするものなるを以て充分に固定し能く合體して殆んど同一體となり而して癒着せる接芽は翌春砧木より營養を

仰き健全に發育するものなり然るに此頃新梢を嫁接するも其新梢は尚ほ生理的作用を營むものにして之を切取り嫁接する爲めに新梢は養液の供給を欠き平蕊層を生じて合體する迄生活すること能はずして遂に枯死すべし

●蠶蛆の件に就き質問

石川縣石川郡安原村
大日本蠶絲會員
北川八太郎

蛆蠅の產卵したる桑葉を蠶兒に與ふるの害あることは既に蠶蛆調査に依り知得せり然るに予の桑園は多く蛆害の虞ある濕潤の陰僻地にして然かも人家の近傍にあるを以て蠶兒を飼育するには如何に發生を早むるも到底蛆蠅の產前に上簇に至らしむる能はず昨今兩年間に壹千五百餘歩の桑圃を新開地に設けたるも向兩三年の間は到底摘桑の用を成さず佐々木理學博士の（蠶蛆驅除に關する意見として）第一に示されたる蠅卵付着の桑葉を取除等は多くの手數を要し收支相償はさるべし亦第四第五に示されたる三眠前には多くの桑を要せず畝逆ひに刈取るも尙其幾分に過ぎず他に何ぞ驅除亦は消毒等の良法なきものなるや佐々木理學博士の御明教を仰ぐ

答

大日本蠶絲會
技師委員
理學博士　佐々木忠次郎

蠶蛆の蠅の桑園に產卵するを防御するの方法は大略既に御承知の事と考へらる然れども之を根本的驅除するの方法は法律に依り全國一般に之を實行するに非ざれば驅除の目的を達すること能はざるものと信ず又た濕潤にて陰僻なる桑園を使用して蛆害を免かれんことは實に困難なることなり故に右の桑園より採集せる桑葉は三眠前に給與し夫より以後は高燥にして空氣流通の宜き桑園の葉にて育蠶し蛆害を除くより他に良法なし

●蠶室の件に就き質問

愛知縣渥美郡岡村
大日本蠶絲會員
中野十七八

(一)余が蠶室の位置は宅地狹隘にして南は九尺を隔てゝ居宅に對し東北は他人の所有に係る竹藪に接し西は縣道に沿ふて水田に對せり斯の如き位置なるが故に西强風の時は溫度低下して非常に乾燥することあり此の場合眠中なるときは如何にせば可なるや

(二)右の如き天候に毎年二三回は必ず遭遇す之が爲に害ありとせば多く何病を發するや

(三)前述の如き蠶室あるを以て常に多くの火力を用ひざれば七十度内外の溫度は保ち難し依て明年は發生より二階に於て飼育せんと欲す蠶兒生育生の適否如何

右三件御明教を請ふ

答

大日本蠶絲會
技師委員
町田菊次郎

(一)質問に依て案ずるに該蠶室は午前は低溫に過ぎ午後は忽ち高溫に傾き一晝夜四六時中適當なる陽氣を受くること比較的少なく加ふるに多くの場合に於て濕潤に傾き且西風に依て乾燥するが故に乾濕は極めて不平均にして育蠶上不適當なる論を俟ざるものゝ如し然れども其室の構造と設備を知らざるに於ては確たる斷案を下す能はず質問の要旨なる眠中低溫乾燥の場合に於ては設備を嚴重にして冷氣と乾燥を防ぎ假令眠中なるも適度に室内の溫度を高め乾球と濕球の差四五度位に成し置くときは毫も蠶兒に害なきものなり

(二)右の蠶室内に於て蠶を養ふは極めて至難なり常に多くの場合に於て健康を得るは熟練するにあらざれば保證し難し要するに一二齡間は飼育するに易く四五齡に於て困難なり動もすれば蠶兒肥大に過るの傾向あり是を溫氣の害とす問者は多く眠中の取扱に苦心すること思ふに眠中の害にあらずして弱蠶の結果により不眠蠶、空頭蠶、透明蠶、又多くの膿蠶等を生ずることあるべし右は余の推想にして詳細は記事の要領を得るにあらざれば明答を與へ難し

(三)常に火力を用ひざるを得ざるは即ち東北方に藪ありて蠶兒に必要缺くべからざる想の快溫を受くること遲く從て午前中は常に寒冷なるの致す處なり假りに七十度平均に保溫せんか右午前寒冷の缺點は火力に依て補はざるべからず又二階と下層との可否に付ては室の設備を知るにあらざれば一概に論定するを得ざるも概して一二齡は下層を良とし四五齡には二階を適當とす然しながら宅地濕潤の場合にありては始より二階を使用するの勝れるに如かざるべし其乾燥の如きは防ぐに易きのみならず育蠶上却て必要缺くべからざるの要素なればなり

●鱉蛆寄生繭鑑別法に就き質問

青森縣三戸郡北川村大日本蠶絲會員　岩間　磯吉
島根縣八束郡忌部村大日本蠶絲會員　周藤　誠一

種繭撰別の際に於て鱉蛆寄生繭の簡易なる見分法あらば御教示を請ふ

答　大日本蠶絲會技藝委員　吉池　慶正

種繭中に鱉蛆の寄生するや否やを鑑別するに左の三法あり

(一)聽響法　とは一粒づゝの繭を耳に宛て拇指を以て其の一端を指彈し其響音を聞て鱉蛆寄生の有無を判斷するなり此法も確に一の良法たるに相違なきも多量を撰別するには往々耳の鼓膜を傷むるの憂あり此法を行ふときは宜しく耳形の挿繭器を用ふるを可とす

(二)檢動法　は即ち焙爐の上に生繭を一粒づゝ併列し強き溫度を加へ其振動を見て鱉蛆の寄生を下すなり此法は短時間に多量を撰別し得るの利あれども往々蛹躰を損傷せしむるの憂あれば好ましき良法にあらず

(三)透見法　此法は暗室又は暗箱の中に繭形大の孔を穿ち繭を之に挿みて透見し若し蛹体透明にして黑點なければ鱉蛆の寄生を免れたるものとなすなり此法は前二法に比し最も安全にして短時間に多量を撰別し得れども鱉蛆の發育遲ければ黑點を認むべかからざることあり宜しく注意をなすべし近時此理に基き福島縣長野縣地方に檢蛆器を製造販賣する者あり

●風穴構造の件に就き質問

德島縣板野郡松島村大日本蠶絲會員　須見勝三郎

縣下に一山あり此山巔に風穴を構造せんとす今其山の狀況を左に記載し適否及構造法等御教示を請ふ

一山巔は海拔三千七百六十二尺にして風力常に強し

二氣候は毎年五月二十日頃櫻花始めて綻び山下よりは凡五十日以上遲し

三山陰寒冷の處を撰び穴を穿ち屋根を爲し雪を貯ふるに盛暑の候に至るも融解せず

四地質は往々大なる岩石あるも風穴を造らんとするの位置は細砂を混ずるの粘土なり

五風穴を造らんとするの地は山頂より町許を下り西北に面し夏尙寒き所なり

六山上は周年半は雲霧に覆はれ頗る寒冷なると共に甚だ濕潤なり

答　大日本蠶絲會技藝委員　土屋　泰

蠶種貯藏を目的とする風穴は其名の如く自然に冷風の吹き出づる場所に人工を加へ蠶種を入るゝに便ならしめたるものなり故に冷風は穴の四壁より吹き出て外氣の變動如何に關せず構内は能く一定の低溫を保持するなり

而して右の如き場所は概ね小なる岩石のみ重疊して地層をなし之を掘り崩すも殆んど土壤なく各岩石の間隙よりは斷へず冷風を吹き出すなり

故に縱令其地の平均溫度は低しとするも通常の地層に構造せる風穴は外溫の變化するに從ひ構内の溫度も亦變化するが故に蠶種の貯藏に適せざるものとす

質問の山頂は海拔高きを以て春暖の遲きは素よりなりと雖も其地層の性質より考察せば蓋し冷風の吹き出づる處にあらざるべし何となれば細砂混入の粘土質なればなり

果して推察の如しとせば人工を以て通風の土管を埋設するも自然氣溫の變化を免れざるを以て六月已後迄蠶種を貯ふるに堪へざるべし

凡そ風穴を構造せんと欲するものは先づ其地に就き三月已後八月中旬迄の溫度を觀測し其變化の次第を詳知するを要す即ち外氣の溫度の上昇するに從ひ冷風の溫度も亦漸々上昇するは免れざる處なりと雖其上昇の順序が不規則なるか或は八月上旬迄に華氏五拾度を越ゆるが如き場所は風穴として適當ならず可成四十五度已下なるを要す

風穴の構造は其吹き出づる風力の强弱溫度の高低と濕氣の多少とに由りて斟酌すべきものにして一樣の式なきものなり

◉絲　況（Marché des Soies）（Raw Silk Markel）

●横濱市場

燒くが如き炎熱と戰ひ玉なす汗に可憐の小女が繰製しだる本國の生絲は漸く横濱埠頭に集注するの時季とはなれり、其七月中に於ける當港市場の光景果して如何、上旬にありては前月に引續き不味沈靜を以て終り、中旬に入りては稍を商聲を聞くを得たるも必竟當用口の補充買に過ぎざるものゝ如く氣配又依然不昧なりし、下旬に至りては相當の販售あるを見たるも相場は保合を續け活氣甚だ乏しかりし、然り而して客月よりの持荷數は二千二百五十五個半にして入荷は一萬六千五百三十三個、之を合算するときは一萬八千七百八十八個半なり、此内賣了せるもの七千三百六十八個半、地方に積戻せるもの四百六十二個、之を合計するときは七千八百三十個半となる、又之を客年の本月に於ける狀況と對照するときは、客年は入荷一萬六千四百〇九個にして積戻七百五十九個賣了八千百十一個半なるを以て、本年は昨年に比し入荷に於て百二十四個を增し、積戻に於て二百九十七個を減じ、賣了に於て七百四十三個を減じ、而して本月中の最高價は三河製絲太の一千〇八十圓にして、最低價は岩代共同二馬折返の九百十圓なりとす今最高價を前述月及前年に對照すれば左の如し。

生絲最高價月別前年對照表

明治三十六年			明治三十五年			價格の差
一月	靜岡縣横須賀製絲	一、三五〇圓	埼玉縣	埼玉製絲	一、一〇〇圓	二五〇
二月	埼玉縣埼玉製絲	一、一〇〇 同	同	同	一、〇〇〇	一〇〇
三月	愛知縣飯尾製絲	一、〇〇〇	鳥取縣	倉光製絲	一、〇〇〇	〇
四月	岐阜縣金華社製	一、〇八〇 同	同	同	一、〇〇〇	八〇
五月	岐阜縣堀川製絲	一、一一〇	埼玉縣	埼玉製絲	一、〇一〇	一〇〇
六月	長野縣小川製絲	一、〇八〇	同	同	一、〇一〇	七〇
七月	愛知縣三河製絲太	一、〇八〇	京都府	靜岡縣塚本製絲太	九〇〇	一八〇
				同　細新	一、〇八〇	〇

今左に本月中の生絲集散種別表を掲げて參考となさん

明治三十六年七月自一日至三十一日生絲集散表

器械	持越	入荷	賣了	地方積戻	繰越
糸繰	一、八八〇半	一、五八〇	一、七八〇	四八	九〇〇
折返し	三	六〇六	一、〇二一	四	一、〇〇〇半
雜絲	八半		一八		四四四
合計	一、八九〇半	一、六三三	一、七九〇半	四六	一、〇八六

明治三十六年七月自一日至三十一日生絲集散日別表

項目	入荷	手合	賣了	引戻	輸出	地方積戻	問名	製	産	器械	絲	高價	低價
一日	三五〇	八〇	八〇			六〇	信濃	江依	夾三河戸	繰糸	太	一、〇八〇	一、〇〇〇
二日	六八半	五五	八〇			三半	下總上野	三富	河田	繰糸	細	一、〇八〇	一、〇〇〇
三日	六八	三三	一七			三	越後	丸天	水戸	繰糸	太	一、〇八〇	一、〇〇〇半
四日	四五		八〇		三六	四半	信濃美濃	佐久間	士林	繰糸	同	一、〇八〇	一、〇〇〇
五日	五六半				三六				共同				
六日	二六	一四	五〇	三		五半	武蔵	長厚	社製	繰糸	太	一、〇八〇	一、〇〇〇半
七日	四五	三六	三六				三河	白林	生糸	繰糸	細	一、〇八〇	一、〇〇〇半

備考

一、表中草位個は九貫匁を指す

二、持越とは客月より本月に持越したるものにして本月一日の調査繰越とは本月より翌月に繰越すべきものにして本月末日の調査に係る

三、前月分の繰越と本月分の持越と其數一致せざるは商談中のものありしに依る

四、繰越以外に商談中のものありと知るべし

五、實了中米國に輸出せるものは三千三百〇一俵にして歐洲に輸出せるものは四百十九俵なりとす

但し一俵は十六貫目なり

尙左に生絲集散日別表を示すべし

器械太	□	糸繰	×
同　中	△	折返し	+
同　細	○		

一向に氣乘りなき狀を示さず其だ不振の傾向なりしが、總て沈靜錄々商聲を聞かざりし

引續き抄々しき商談なく面白からざる成行なりし

沈靜に加へて米國獨立祭の爲め新規手合皆無になりし

日曜日

諸館も錄々商聲殺せず休日前に比し當用口へ合なりしも直なりしも商ひ出來ざりしが何分不引立の狀況なりし

| | | |

●里昂市場（七月五日報）

當市場の取引は不相變不振の模なるが若し此不況にして倘繼續したらんには製絲は少からず困難することならん何となれば製絲家の購入したる今年の繭價は大に高直にして生絲相場の現相場に比して其上に出づべき有樣なればなり

生絲の注文は目下の處未だ零々たり弗蘭機屋の申出直段製絲家に不充分なるが爲にして斯は本年四月の降雷よりして機屋は生絲の騰貴せし次け爲にして斯は本年四月の降雷よりして機屋は生絲の騰貴せし次け爲にして斯は本年四月の降雷より一般製造な控へ爲に一時生絲の需要が縮小されたる傾きあり然る機屋の手許在荷は孰も減少せし有樣なれば或は二三ケ月後に市場再振を見ることあらん然れども今日の處未だ充分の買入現ほれずして製絲家は其出現を待ち居るものと知し

●未關市場（同上報）

未關市場は不相變繭の出廻如何と一々氣揚へ染て取引監するものなし但望日は此處甚だ多く去れ共買人唱直安くして製絲家の爲には柔小の利益だもなし。

●上海市場（八月七日報）

當地生絲の氣配は前途實數力に対して今週は英國手筋へ新規の注文到着せし模樣にて各買人は何れも買進み夫々交渉の結果七星絲金鱗六百十五兩祭麒麟五百九十五兩の格合にて昨日迄に虎絲六百餘袋の手合出來ぜり出來直は前週より十五兩より品により十兩高なりし尚引續き英國手筋にて夫々交渉しつゝありしが賣人高張り且爲換下落せし點もあり方々注文の直印と反幾分不引合の爲に市場へ向け電信照會を發したる模子なり返電の如何に依りては續ひて商内出來すべき形勢なり

器械絲は歐洲手筋にて夫々商談に取懸りつゝあれ共是又直段不引合の爲め本國へ照會中にて纏か四十袋の補充買に過ぎず相場は十兩乃至十五兩高なりし

野蠶絲は別段商内出來不申併し他の價に連れて幾分小論りの樣子なり

●外報（Nouvelles étrangeres）（Foreign News）

●清國蠶業の狀況

在清國　大日本蠶絲會通信委員　關　貞　江

右は關氏より客月二十日附を以て本會幹事吉池慶正氏に宛てたる第二回目の通信にして重に無錫地方踏査の實況を記述せるものなり

（前略）前便申上候如く片倉組の味澤氏と同道蘇州より無錫に向ひ視察を遂げ抗州に歸着仕候無錫の地は名に負ふ春蠶地にして本年の如きは實に三百萬兩の取引行はれたる由に候之を以て清國視察員は重きを此地に指く者多しと雖も今抗州を發し湖州より此地に至れば桑園の模樣抗州及紹興府下に比して甚だしき差異あるには一驚を喫し候即ち春蠶用の桑を夏蠶に摘採することに至り殊に酷しく其慘狀毫も本邦と異ならず故に繭の品質惡しく春繭百斤に對し紹興の夫れに比し十五兩乃至二十兩の相違あるは無理もなき次第と考候夏蠶は到着の日（十一日）繭行は開秤仕候へども昨年に比し三分の一の收穫即ち乾繭五千擔の見込の由且つ相場は上等生繭百斤三十六弗を唱へ候而して伐採したる桑梢は既に二尺位に伸暢せるも芽次け爲して悉く摘葉せられ居候然れども秋期迄には六尺以上に達し繁茂の狀本邦にては夢想するとを得ず天然の利實に羨望に不堪候

上海の景況は目下地方よりの出荷ありて約三萬擔と申居候是等は上海製絲に供せられたる剩餘なるべく且つ金利は非常に高ければ或は舊盆勘定期前には投賣する者有るべくと見込を附する本邦人も有之候（後略）

●米國に於ける蠶絲業

目下歐米淺草中の石渡蠶業講習所技師より京都蠶業講習所に宛てたる米國蠶絲業の通信な掲載して參考となすべし

一、本邦生絲の重なるものは米國に對て輸出せられ當紐育に於て機業家に賣却せらるゝものなり故に本市近傍の機業家の生絲需要の有樣を注意することは本邦製絲家に取りては頗る必要なる事項なりとす

二、本邦生絲に於ける缺點は現今に於ても尚豫て本邦視察者又は領事の報告せるものと同樣なれども特に意を注ぐべきは纖度の齊整にあるが如し即ち撚絲場に至りて其機械の回轉の有樣を見るに實に速かなるものにして些少の纖度の差も直に器械の運轉を止むるに至り一定時間に於ける仕事額を小ならしむることと大なりとす

三、昨年米國絹業協會が出したる回狀に基きたるものは當地に於て實際賣口早き有樣なれば出來得る限り米國向は同回狀の注文の點に一致せしむる方利益なり

四、近頃或る本邦絲にて染色上小白點を殘すことに有之此小白點は從來歐洲輸入の生絲には認めたるものの少からざりしも日本絲には生することあらざりしものなり

此缺點は其絲固有のものに又は製絲、撚絲、練絲、染色何れによりて生ずるものなるや歐洲絲に於ても未だ原因判明ならずと云ふ今日本邦絲に此缺點を生

するを見るに至りて、は其缺點の何れより來れるものなるやを明にするの必要ありとを等閑に附し斯の如き事項の尚本邦生絲に續出するに至りては實に容易ならざる事なりとす

五、當地に於て柞蠶絲の輸入あり絹紬の製造盛に行はるゝ傾向あり本邦柞蠶絲製織上一考すべき價ありと信ず

六、養蠶業に於ては試驗的に行ひ又相當結果を收めたるものありと雖も勞力の高價なる當國に於ては未だ經濟上一角の事業として行はれ得るに至らざるは內外人共に認むる所なり然れども試驗として米人が當に養蠶業に向て意を注ぎつゝあるは忘るべからざる事實なりとす

●清國玉繭の輸入に就て（承前）

在清國　大日本蠶絲會通信委員　西原德太郎

（二）右の地方視察に要する日子及び費用　約一ヶ月あれば宜しく費用は一日貳圓乃至參圓にして總計百五十圓乃至二百圓あれば往復共に足れり但支那內地を旅行するときは割合に金を要するものと思惟せられたし如何とすれば日本の如く人力車或は汽車に乘る能はず船に乘るを得れ共支那の習慣として必ず一人のボーイを從ゐるが普通にして通辯の給料ボーイ給料等合算すれば一日に參圓を要すべし

（三）渡清に關する衛生的注意及時期の適否　若し支那內地を旅行するときは日本人の宿泊に適當なる宿屋は全くなしと云ふて可なり且支那人の旅行するにも蒲團を持廻るが普通なり故に毛布を用意せらるゝが最便利にして大抵は船中に宿泊し陸上の家に泊する事は稀に之あるのみマラリヤの本場なれば機那の御携帶は肝要なるべし

（四）玉繭購入に際し渡清する好時節　毎年早晩中一定せざれども支那にては清明を以て催青し標準とせり然しながら

紹興府新昌及嵊縣は清國江蘇浙江省中最早くして清明より約二週間以上早く第二は同府下諸暨縣にして第三は杭州府余杭縣第四は杭州府下にして毎年清明を以て催青に着手一週間以上にて發生す第五は嘉興府下各縣にして杭州より五六日遅く第六は湖州府下各縣にして最遅きは無錫なり右期日は貴會報にて周知せられたし

左に上海某洋行其他の筒處に於て小生が取調たる事項を參考に供す

上海製絲場及內地器械製絲場にて販賣する玉繭量餘程以前は一年僅かに參拾萬斤に過ぎざりしも目下年々六七十萬斤にて此中半額以上を松村洋行に於て賣買すと云ふ

右の如く玉繭を購入するには上海の製絲場及內地器械製絲場よりするものなるも本繭と共に來る可き產地を上海にて習慣上左の如く區別せり

普通年　紹興、三、三分　無錫六、七分

其他杭州物少許（海寧湖州塘栖等より來る者を總稱す）

但昨年は春蠶大不作にて紹興三分無錫三分無錫夏玉三四分にて意外に無錫より多くの玉繭出でたり

今玉繭購入の手續を示せば左の如し

一皆仲買人の手により製絲場に購入し直接の賣買

甚少し但品物受取の時は仲買人と共に製絲場に到り磅秤にて秤量も七五に乘じて和斤に改算す

一仲買人手數料は百斤に付一兩或は一兩の二三分（目下一兩は一元三拾二仙餘に當る）

一右手引期は概七八月より始まり九十月に終はり二月より六月迄休業

一右賣買は凡て兩にて計算し弗計算をなさず

一右代價は現金拂に非ずして月火水の日に買受けたる者は小切手を振出し置き其週の土曜或は日曜に渡し木金土の日に買取りたる者は土曜日の日本郵船會社定期發船迄に船積及荷爲替問に合はざるに付き來週渡しの小切手を振出すが故に極少許の資本金にて商賣なし得る者とす（完）

●遲羅の蠶絲業

在遲羅　大日本蠶絲會通信委員　細谷善助

右は遲羅磐谷にある細谷善助氏より本會肇事本多岩次郎氏に寄てたる書面にして人情風俗習慣等の詳細に記述あれども今茲には他日割愛し蠶絲業に關することのみを揭載せり

●生絲の集散地　は磐谷を去る二百哩許（磐谷より汽車便あり）コーラットと稱する所にして此地方にて賣買行はれ印度、馬乘地方に輸出致し候絲色は佛國種同樣黃色にして每年の產額は二千ピコールス（一ピコールスは日本の三百斤）と稱し居り之が賣買の權利は悉皆支那人の手に握られ居候

●蠶業局の規模擴張　遲羅政府は今回蠶業局の規模を擴張し單に養蠶業のみに止まらず更に進んで農業に關する各種に渉りて實際上の經驗を爲す事に定められ候先づ其手始めとして各地方の土壤及び種々の植物穀類等の種子は孰れも試驗に供する爲めに取集められ候之れ恐らくは遲羅をして農業國たらしむる階梯ならんと存候

農事に關する有益の實驗　蠶事局設立以來養蚕として行はれ其二十ライの桑園には日本種及び遅羅種を植付け此等桑樹に對する實驗に依れば或る一種の日果を除く外は成長及び桑葉の收穫等到底遅羅種に不及殊に遅羅種の桑樹にて最も優等と認むべきはモンクエオ、モンノオー、の二種に有之候桑樹は元來肥沃せる粘土の地に適するものなるが遅羅國に於ては到る處ろ桑樹に適せざるは無之樣見受け候

飼養日數　養蠶業に就て實驗せられたる結果に據れば產卵發生より發蛾產卵に至る迄の日數は約四十日乃至五十日にして之を日本及び歐洲諸國に比しては至て短期日に有之候又當國にては飼育時期僅に二十日より二十六日に至り假令氣の季節と雖も三十日を出ること無之候斯の如く飼育時期の短きを以て同時に繭卵の時機に於ても從て僅少なり日本及び歐洲諸國に比較して時日の短きは全く氣候の關係に起因するものと思考致され候之を要するに熱帶地の養蠶は溫寒兩帶地方に比して其時期遙かに短かし之れ熱帶地方の育蠶に便利なる所以にして同時に又桑葉の成育も速かなるを以て當國にては養蠶度數約八回を重ぬる左のみ至難の業に有之間敷かと存候

新舊兩式の養蠶法　蠶事局は創立日尚淺きにも係はらず內地の養蠶製絲の事業に如何なる神益を與へたるかに就ては之を二樣の試驗に依て識別致され候固有の遅羅法式に依り又其一は進歩したる方法即ち現時日本に於て行はれつゝある方法に據て確たる結果を得たる事に候依之觀れば後者に於ては前者の三割以上收穫の增加するを實驗せられ候更に又後者に由て製造したる生絲は其價格一千錢以上に出で之を前者に依て得たる價格僅かに三百錢除に過ぎざるものに比し甚だしき懸隔を生じ其得失到底同日の論に無之此れ大に注意すべき點に有之べく候

農家の副業として最も有益　蠶事局の調査に依れば一ライより生產する桑葉は一ケ年に四千キログラムに上り十四キログラムの桑葉は一キログラムの生繭を出し得らる故に養蠶家は一ケ年一ライより生ずる桑葉にて二百八十五キログラムの生繭を得此より生ずる生絲の價格は百五十錢より二百錢に當り候へば三四ライの桑園を有するものは大約一擔の生絲を生產するの割合にて實に農家の副業として尤も有益なる事業に御座候爲又外山氏の視察したる報告に依ればコーラット洲のみにても蠶絲業に從事するもの三萬人以上ありされど同市場に現はるゝ生絲は唯だ下等品のみにて其額も多からず大約一ケ年の產額二千擔に過ぎずと申居候之れ上等品は擧げて彼等自身の需要に供し其殘餘の下等品のみコーラット市場に輸送するの有樣にて養蠶上の技術及び進歩せる器械は是非共必要に有之候同時に又此新式方法を利用すべき技術者の必要は申迄も無之候

蠶業學校の設立　故に蠶事局に於ては一方に學校を設立し生徒を募集して蠶絲業を傳授せしむる事となし近日中國王陛下の選定に係る男生十名女生十名と外に十五名の生徒を以て授業を開始する事と相成候等生徒の教授用として五人繰の製絲器械を備へ付け其他の事業も本年末より開始する事と內定致し候尙蠶事局の支所をコーラット及びナコンチヤエシーに置く目下某養蠶教師は本邦人四名と遅羅人の助手二名と共に熱心に教鞭を揮ふつゝあり何分創業匆々の事とて事業の成績見るべきものなく詳細は更に後日に讀り御通信申上候云々

●米國に於ける蠶兒の飼養

（在シカゴ帝國領事館報）

當合衆國は歐米諸國中第一等の絹布消費國にして生絲のみの輸入額にても年々四千萬弗以上、絹製品の輸入は三千萬弗以上に上る程なるに絹布の原料たる生絲は總て外國の輸入を仰ぎ居れり然るに當國中地味風土は桑樹の培養に適し其氣候は蠶兒の飼育に適する地方多きことは曾に學說の證する所に止まらず百年以前米國には養蠶業の成立したること歷史の證する所なりとて（其概畧は後段に記述すべし）近來養蠶の事は頻に當國人の注意する所となり華盛頓政府の豫算には養蠶試驗費一萬弗を撥せ技師を傭聘して桑樹の栽培蠶兒の飼育を研究せしめ其成績を印刷して廣く之を事業地方に配付し民間にても迅々實地の試驗をなす者あるに至れり、當國は我生絲の最大得意國なるが故に右の傾向成行は本邦人の最も注意を要する所なるべし、依て左に試驗に係る一二の實例を掲げ世人の參考に供すべし

政府の施設　合衆國政府農務省昆蟲部長エル、オーハワード氏は夙に養蠶奬勵の事に志し千九百二年の議會々期に於て特に養蠶研究の爲め一萬弗の豫算を得ニーチ、エー、クリ嬢人を聘して特別委員となし其研究の結果を印刷して廣く之を有志の農家に配付せり、同嬢人は多年間伊佛諸國に在留して潛心養蠶術を研究したる人なりと云ふ、又ハワード部長は省內植物產業局に委托して桑樹移植の事を研究せしめ是又其結果を印刷して廣く之を配付せり又當國南部諸州々政府の當局者中にも養蠶研究中の向ありと云ふ、タルラー、フォールス養蠶會社の事　獨逸人ルイ

ス、ピー、マキーなる人は曾て歐洲にて養蠶術を研究し多年前當國に移住の後紐育最寄にて絹織業に從事したるとある由なるか近頃地をヨーヨア州タルrne Ar ung Co)を紐織し其資本金を廿五萬弗（拂込額未詳）とし既に土地二千五百噬（一噬は我四段十八歩餘）を買收し桑樹三萬本を植付け（我當業者にて實地視察したる人の說を聞くに桑樹は實生にして悉縮病に罹りたるもの多しと云ふ）且つ野生の桑樹も少なからずして養兒を飼育せり其の成績は初年の事として蠶病に罹るもの多く收獲至て少く其の成績は小官（清水領事）も見本を得て之を一覽するに實績にて繭肉薄く解舒至て惡しと云ふ

社長マキー氏の計畫は伊太利國より多數の養蠶熟練家を同地に移住せしめ其土地を分割して蠶業に從事せしめんとするにありて既に約束濟の向もありと云ふ

養蠶奬勵會の組織及養蠶雜誌の發刊　前段に記載せるマキー氏は頗る企業心に富める人にて養蠶會社創立の外各種の方面に向て養蠶奬勵の事に黽勉せり其一は養蠶奬勵會の組織なり、同氏はヨーヨア州政府の協賛を得て去二月中同州重立たる農業者を首府アトランタ市に招集し協議の末奬勵會を組織し五十人内外の熱心なる會員を得たりと云ふ、其二は養蠶雜誌の發刊にて之をシルクと號し月々發刊し養蠶の厚生に利あるを說き且つ廣く蠶業に關する智識を普及せしむるを以て目的とす、其掲載する事項は蠶業の歷史、世界養蠶國の現況、養蠶及桑樹移植、栽培法、絹製品の市況等なり

シカゴ市に於ける養蠶試驗　シカゴ市に住する音樂師にてアルベルト、ラベルテと云へる人あり其住宅にて養蠶を試みたるに其成績頗る良好なりとて新聞紙上に喧傳せらるゝに至りたれば小官は去る六月廿一日實地に就て之を視察せり時恰も上蔟に際し既に成繭したるものも多かりき其繭は小粒の白繭にて相當の肉合あり試驗の結果解舒も惡しからずと云ふ

今ラベルテ氏直話の要領を左に記述すへし

余は佛國に生まれて人となりたれは養蠶業は幼時より慣熟せり後當國に移住し十四五年前ルイヨアナ州にて養蠶を試みたることあれとも氣候適せずして失敗に了はりたり、此度は佛國蠶種三千粒を當國農務省より申受け試養したるに去る五月八日より悉く發生し其生育も宜しかりしか固より桑園を有するにあらす野生若くは庭園の桑（黑色の桑實は鶏の好む所なりとて養鶏家庭園に桑樹を栽ゆるものありと云ふ）に依賴するの外なかりければ桑葉不足に窮し止むを得ず蠶兒三分の一を放棄し殘餘を保育したるに悉く健全に成長し御覽の如く成繭するに至れり故に若し相當の桑樹を栽培して蠶業を營むときは必らず好結果を見るへし云々

蠶業に要する資力問題　蠶業は機械力を籍ることを得す是非とも夥多の人力を借らさるべからず故に米國の如く賃銀の高き國柄にては地味氣候如何に桑樹蠶兒に適するも到底經濟上の失敗に了はるへしとは普通世人の所思なるへし、然れとも當國南部に於ては黑色人の數頗る多く賃銀も安外低廉にて場所によりては北日給五十仙以下なりと云ふ、又其地方白人の妻女子弟等は紡績所に傭はるゝ外相當の業務なく紡績所勞働は健康若くは風紀上より嫌惡するものも少なからざれば養蠶業は相當に奬勵せは是等妻女子弟等の爲めに歡迎せるるゝに至ることあるへしと云ふ

米國に於ける養蠶の歷史　マキー氏か其雜誌に揭載せる蠶業歷史中米國に關する部分の概要を左に譯載すへし

佛國の王（ソリー四世（千五百八十九年即位千六百十年崩御）蠶業を伊國より移し其成績頗著なりければ英國の王ヨエームス一世ヨオルツ二世等之に倣ひ頻に養蠶を奬勵したれとも英國の地味氣候は之に適せざりければ其殖民地なる米國に於て奬勵せり百七百三十二年ラグレッルブ將軍ヨオルツア殖民地を設定したる頃サヴアンナ河の沿岸に野生の桑樹あることを發見し殖民を誘導して蠶業に從事せしめ本國議會は奬勵金（年額一萬弗）を議決し移住民に官有地を下付するには一定の桑樹植付を以て必要條件となし又殖民地議員被選者の資格中にも所有地内桑樹の數若くは家族生絲產出額を加へて迄養蠶を奬勵したれは追々其業發達し十八世紀の央より追々サヴアンナ、ヲキラデルフキア、チャーレストン等には製絲所も起りて其生產を英國に輸出したりき然るに十八世の末より劇かに發達したる棉作、獨立戰爭及千八百三十九年より四十年に涉る稀有の嚴寒（此嚴寒にて東北諸州桑樹は皆枯死せりと云ふ）等の爲に當國蠶桑の業は漸次荒廢して處々野生の桑樹を見るの外其跡を絕つに至りたるものなり云々

意見　之を要するに當國蠶桑の事は百年前の頃一營業をして成立したることあるにもせよ既に全く衰廢し近來の試養は全然新規の一企業と看做すへきもの

ならん、然れども當國企業家の多きこと、土地風土の廣漠にして各種の氣候を有すること、國人の學理の應用に長すること、伊、佛等より熟練の當業者を招募するの容易なること等を思ひ合すれは當國南部米作物興の例の如く意外迅速に斯業の發達を見ること、なしとも謂ひ難し若し當國にて斯業發達し來れは保護稅の作用の恐るへきあり故に右等試驗の成行は刮目して注意すへきことなり

●亞弗利加

獨逸政府は同國殖民協會の會長たるメッケンブルヒのアルブレヒト侯の建議を容れ東方亞弗利加に於ける獨逸の殖民地に養蠶業開始の目的を以て多量の蠶種を同地方に向け發送したりと云ふ

●米國の管絲輸入稅問題

此頃紐育にては佛國より始めて管絲の輸入を爲したるものありしに紐育稅關は之を加工品と認め一封度四十仙の稅金を徵收せんとしたるに該輸入商人より訴願ありて未だ何れとも決定せざる由なるが管絲は繭より操出したる儘の生絲には相違なきも既に管の助によりて繰返を要せず直ちに撚絲となし或は其儘にて機臺に上し得べきものにして普通の綉絲と全然異なるものなれば加工品として課稅すべしと唱ふるもの多く目下同地に於ける生絲商人間の一問題となり居れりと云ふ若し管絲の輸入にして愈々無稅と決するに於ては續々其輸入を爲すものありて本邦絲に多少の影響を及ぼすことなしとも注意を拂ふべきことにこそ

●正誤

前號第百參拾四號）一千九百二年の蠶絲生産高中近東及中央亞細亞より極東の間印刷上の錯誤にて脫落あり依て茲に補正す

近東及中央亞細亞

ブルース及アナトリー	四一八、〇〇〇	四七〇、〇〇〇
四里及レーブル	四二五、〇〇〇	四七五、〇〇〇
サロニツク及アンドリノープル	二〇〇、〇〇〇	一七〇、〇〇〇
勃爾加里塞爾維及羅馬尼	九六、〇〇〇	一一〇、〇〇〇
希臘及クリート	六〇、〇〇〇	五五、〇〇〇
高加索	四四〇、〇〇〇	四六五、〇〇〇
波斯及趙國給斯丹輸出	二五五、〇〇〇	五四五、〇〇〇
計	一、六九四、〇〇〇	二、二九〇、〇〇〇

極東

◎雜報（Nouvelles diverses）（General News）

●技藝委員の囑託

左記の諸氏は技藝委員として本會の爲に盡瘁せられしか本會規則第二十三條に依り退任となりしに由り更に同二十條に照し會長より技藝委員を囑託せられたり

農學士　針塚長太郎
吉池　慶正
農學士　宮原　忠正
角田喜右作
丹羽敬太郎
浦部良太郎
農學博士　大森　順造
法學士　桑田　熊藏

（參照）第二十條技藝委員は會長に於て學術技藝に達したる者を選み蠶絲業に關する調査或は質問の應答を囑託するものとす

●通信委員の囑託

本會に於ては規則第二十一條により左記の諸氏に通信委員を囑託せり

佛國　峰村　喜藏
米國　永田　實稔
伊國　野村彦太郎
米國　黑岩　直喜

（參照）第二十一條通信委員は會長に於て海外に在留する會員中より之を選み蠶絲業上の通信報道を囑託するものとす

●京都蠶業講習所卒業證書授與式

京都蠶業講習所に於ては客月三十日本科第三回別科第四回講習生卒業證書授與式を擧行せり式場は事務室の南方に當れの敷場にして當日午前十時清浦農商務大臣、酒勻農務局長、大森京都府知事其他朝野の來賓及び職員一同著席するや松永所長より本科講習生十八名、別科講習生四十五名に卒業證書を授與し次て優等卒業生本科二名、別科二名に賞品を授與し畢て所長の式辭、農商務大臣の告辭、農務局長の祝詞演說、在學生總代の祝辭あり尋て本科卒業生總代小久保金藏別科卒業生總代堀清次郎答辭をなし式全く終れり今所長の式辭、農商務大臣の告辭、卒業生の姓名を擧くれは左の如し

松永所長式辭

本日茲に本所第三回本科及第四回別科講習生卒業證書授與式を擧行するに當り大臣閣下並に朝野貴賓の貴重な尊ふしたるは洵に本所の光榮とする所にして謹謝の至りに堪へず

今回卒業證書を授與するものは本科生十八名別科生四十五名にして之を第一回以來の卒業生に合すれば本科にありては通計四十八名別科にありては通計百七十四名とす而して從來本所を卒業したるものゝ

勢靜を來すに或は蠶業の教育に身を委ねるものあり或は蠶病の豫防に慈善事するものあり其他斯業行政の局に當る者等所業繼承の殘位にして近時官民協力奬勵保護の機運を誘導せんとが改善發達の期運に向かたるを認するに足るべく本所教養の目的是に於て其幾分か達したるものと謂ふべし顧るに從今や蠶業の效成りて論衣都里に歸り日夕として其飲や磨すべく其榮や大なりと謂ふべし然りと雖子は今後にあり諸子等に先づ搖生に注意して一身の健全を圖り氣を緩神の修養に勉めて德義惟れ貴び授り經綸基礎の學を論ずて修重熟意以て後名に所業の爲めに盡す所あるべし惟ふに本所の所位は之を關東の地に比し沃野の開作すべきもの多く而も産額は遙に其下位に在望なりと謂ふべし望むらくは其一己の榮譽を博するに改たるが如き勤勉なる克く地方の本邁者と共に協力一致融合提携して以て斯業經營の術に當られんことを

清浦農商務大臣告辭

外國貿易の論開けし以來蠶絲の輸出年々遞ふて增進し今や輸出品中の首位に占め國家經濟上最も重大なる此に擔くに至れり然り之蠶絲業の前途は尚遼遠にして改善を要すべき點多く發達の餘地亦尠しとせず此時に當り諸子本所の課程を終了し出て斯業經營の術に當らんとす其責任や重大なり謂ふべし諸子其心得を以て本所の教育を受け精勤に從ひ懷重事に處し漸々遂に所業を成ふべし以て本邦の富力を增進し以て國家の前途を開かんとす是れ期待諸子が國家に報ずる所以の道なり一言以て告辭と爲す

卒業生姓名

科

遠賀郡△小久保金藏　唐島縣△神邊準次郎　京都府　本上　恒藏
岐阜縣△梶　清次郎　愛媛縣　山口縣　宗正　鹿輔　長崎縣　古賀次四郎
三重縣　機部　照博　宮崎縣　木部　定敏　三重縣　矢野龜三郎
三重縣　加取新作　福井縣　大崎　武作　京都府　梅原　好松
鳥取縣　汝雲武藏　遠賀縣　森脇新作　愛媛縣　芥川定一郎
三重縣　加藤　由松　鳥取縣　元木　英二　熊本縣　鶴田　實
鹿島縣　神　一靜

別

科

岐阜縣△永　唯一　和歌山縣　益田芳之助
鳥根縣　緋　啓之助　鳥根縣　津森　倫秋
高知縣　鳥村雲之助　宮崎縣　鈴木光次郎
愛知縣　南阪　助吉　愛媛縣　鎌田　安重　愛知縣　佐賀縣　山田　助
愛知縣　岡本　隆治　宮崎縣　小牧　清作　宮崎縣　森岡　清春
岐阜縣　四月　砂　稻葉丸太郎　山口縣　松延　山口縣　田中　耶郎
奈良縣　岩崎　金市　高知縣　汐木　文八　德島縣　今橋　理八
德島縣　伊藤　新吾　山口縣　七條松太郎　山口縣　弘永虎之助
德島縣　岡本　產輔　島根縣　熊田運太郎　德島縣　熊治　新吾
愛知縣　愛知縣　中神　定平　京都府　岩谷　德治　三重縣　眞川源太郎
福井縣　鶴山長太郎　山崎總之助　熊本縣　岩村　等太
鹿島縣　山本　仲太　遠賀縣　中川喜次郎　愛知縣　今村鳥太郎
熊本縣　福田　常喜　岡山縣　景森　繁松　愛知縣　河合　莊三
石川縣　元田　重作　岐阜縣　酒向　正道　京都府　吉岡　周敏
熊本縣　中村　繁八　熊本縣　佐藤　熊治　岡山縣　有友　八郎
熊本縣　高森　勝次

（△印は修等卒業生）

●東京蠶業講習所卒業證書授與式

本月五日東京蠶業講習所に於て卒業證書授與の式を擧けらる當日午前十時清浦農商務大臣酒匂農務局長幷に大日本蠶絲會長松平男爵紫藤生絲檢査所長北他朝野の來賓及び職員一同着席本多所長より養蠶講習

科本科卒業生二十三名同別科卒業生四十二名幷に製絲講習科別科卒業生十八名卒業證書を授與し次て養蠶講習科本科優等生四名同別科優等生一名製絲講習科別科優等生二名に賞品を付與せり畢て所長の式辭農商務大臣の告辭農務局長の訓示あり養蠶講習科卒業生總代小野陽吉製絲講習科卒業生總代川副葉留答辭を朗讀し次て來賓松平男爵の祝辭朗讀ありて式を了れり今所長の式辭農商務大臣の告辭、松平男爵の祝辭、幷に卒業生の氏名を記せば左の如し

本多所長式辭

農商務大臣閣下來賓諸君本日本所卒業證書授與の式を擧行するに方り炎暑の候殊路の應にも拘らず御貴臨の榮を辱ふしたるは本官の深く感謝に堪へざる所なり

本所は去明治十七年山下町に蠶病試驗場を假設し蔟經子病に關する試驗を行ひたるを以て起源とす同十九年之れを當四ツ原に移して蠶業試驗場と改稱す偶々蠶種檢査規則の發布あり本所は之れが檢査員養成の必要を生じ之れが傳習を開始せり是實に本所講習生業の濫觴にして同二十三年は後は地方都會蠶業傳習所の數師若しくは講習教師たるべきものを養成するの目的を以て其程度を高め蠶業上必要の學理を教授せり二十九年に至り蠶業講習所官制發布ありて更に大に其規模を擴張し組織を一變し以て今日に至れり

抑も本所の學ぶべき業務は蠶業に關する講習試驗並巡回講話蠶種配布及び賞罰應答等其一般に渉れるなり而して試驗の成績毎年編して蠶業報告となし一般に配布して之れが普及に勉め一方に於ては又本所の卒業生は各其地方に於て之れが應用並に報告の刊行のみにては到底充分なるを得ざるを常とす然るに本所の卒業生は皆直接に此等業務に關の要なるものを實地に應用し若しくは一般に普及せしむるの術に當る者なればなり是實に本所講習卒業の一般教育者と其選を異にする所へ或は必要に應じ所員を各地方に派して巡回講話講習をなすべし或は蠶病消毒法の實習を開きて之が指導奬勵の任に當るへき者を養成し以て本省調令の精神を貫徹せんことを圖る等應機臨變直接となす間接となす方法に依り明治十九年以來昨年迄に出したる本所卒業生は既に一千五百六十七名あり更に今御卒業生養蠶講習所本科二十三名同別科四十二名並に製絲講習所別科十八名合計八十三名合すれば實に千百五十名の多きに達せり組織の變革は之れ本所の教育方法に於ける當業者子弟の養成に勉めん或は蠶種檢査員となり以て新業に關する法令施行の術に當り又是等の公職に從事せざる者に在りて直接に或は出て府縣郡の技術官となり或は巡回教師となり以て地方に於ける當業者子弟の養成に勉めん或は蠶種檢査員となり以て新業に關する法令施行の術に當り又是等の公職に從事せざる者に在りて直接に或は出て府縣郡の技術官となり或は巡回教師となり以て地方當業者に示しつゝあり又外國人の招聘に依其蠶業學校の教師として赴任せる者前後六名あり外國人にして本所に留學せる者都合十五名内九名は支那人にして他は韓國人なり皆本所に留學の學術を習得して帰國し以て彼國新業改善に勉めつゝあり又昨度より製絲試驗法擴張し製絲講習科を特設して生徒の養成を開始せり蓋し目下の製絲界を觀るに工場が統察するに足る技倆を有する者は至りて稀なり之れが現況なるを以て又は教授の任に當るべき者を養成するの必要を生じ本所の別科卒業生を以て之れが應用並に教授せられて入所せる者多く其他の者に於ても既に夫々各地の製絲

場より招聘の申込み受け今や既に一人も餘す所なきに至れり製絲講習の事業が如何に社會に觀迎せられ又奏效せられつゝあるかは此一事を以て徴認するに足る

本所卒業生が各種の方面に於て新城改善建議の事に從ふこと洵に有述べたる如きものあり然りと雖も其年齢微弱にして未だ悉さ上の智識技藝に於て不十分の經驗技倆に富み且重要の位置にあらるゝもの番くは充分の補佐裏力を給はらんことを

次に卒業生諸子に於て一言すべきものあり諸子は既に三ケ年以上養蠶又は製絲業に從事し然る後本所に入りたる如き者なれば其の本所に於て學ぶ所の理論と實驗とを以て本所に於て其學術を究たるものなり故に新業上の智識技藝に於て既に足るものなれども其の經驗に於て未だ遺憾あり而して今日以後社會に出でゝ之れを實務に應用するに方りては細心注意を要すべきものなり若し此信用なかりせば得たる處の學術を充分に活用することを能はざるは言を俟たずして明かなり而て信用が博するの途は他なし見識に欠く恵実に業績ふ勤勉なるに在り又製絲講習生たる者は卒業生が以て初めと同じ而して其世に觀迎せられる事肯遠へたるが如きものあるが故に諸子の一擧一動は將來に於ける卒業生の信用に關すること頗る大に慎て又本所の體面に及ぼす大にしては即ち吾國の製絲業に及ぼす所のもの決して無心にあらざるべし今日以後社會に出でゝ新業の改善發達豈一日も之を忽にすべけんや而して之れが改善發達の途は主として諸子に依らざるべからずと雖も抑々本當卒者の一致協力に俟つ所のもの頗る多し願へ

に養蠶業の前途は尚遠にして其の經營上新法発攻の人士を要する

清浦農商務大臣の告辭

養蠶は本邦首業の物産なり內農家の經濟之に依りて維ぎ外貿易の均勢之に依りて保たる斯業の改善發達豈一日も之を忽にすべけんや而して之れが改善發達の途は主として諸子に依らざるべからずと雖も抑々本當卒者の一致協力に俟つ所のもの頗る多し願へからずと雖も抑々本當卒者の一致協力に俟つ所のもの頗る多し願へ

ことは太た急なり今や諸子本所の課程を修了し出でゝ社會の實務に就かんとすず其卒業祭大なると共に其責任も亦重し諸子其れ本所に於て講究せし學問を實地に應用し廣く當事者と親力親實して新業の大成を期し以て國家に貢獻するあらんことを努むべし

松平男爵の訓辭

力今科學の發達頗る著しく百般の事業一として之れが努力に支配せられざるはなし是を以て國家の富强を儲せんと欲せば先つ主として科學の發達を圖らざるべからず

本邦養蠶業は古來家國の基礎と稱せられたるものの而も晩近の進歩の他に比して大に遜色ある所以のものは之れ一にこれ研究の不足に在りと謂ふべし

而して未だ至らざる所あるか爲めならずんはあらず

養蠶の發達は最も長足の進歩を爲せるもの一なり然りと雖も之なる外貿易の趨勢に照らし內農家生計の事情に鑑むるときは將來益々之れを改良發達を圖るの必要あること正直の多言を要せざる所なり此秋に際し本所は又茲に八十餘名の卒業生を出して世に縮り介せらるゝ間卒業生諸子は既に實業に相當の經驗を有して本所に入りたるもの今や又更に日進の學術を修め得て將に之を社會の實務に應用せんと欲し斯業發達上貢献する所少ならざるべきは正直の深く信ずる所なり望むらくは諸子心一にして力を協はせ小成に安ずず驕事に慢ずず精勵以て世の望に違ふ勿らんことを本日の盛典に列し欣喜に堪へず乃ち敬て祝言を陳ずて祝辭とす

卒業生姓名

養蠶諸習科本科

宮城縣△小野　陽吉
埼玉縣△熊谷　東正
山形縣　工藤　庄六
山梨縣　古屋　永昌
福島縣△佐藤傳之助
山形縣　水見鍵五郎
東京府　大橋平三郎
愛知縣　伊藤　鉄次郎
長野縣△平澤　貞穂
靜岡縣　富山藤次郎
山形縣　鈴木　三郎

養蠶諸習科別科

佐賀縣△川瀬　榮留
宮崎縣　池田　ヨソ
長野縣　中村小太郎
山形縣　鈴木　トヤ
栃木縣　黑須　サイ
青森縣　伊藤　セト
愛知縣　西尾　さい
（△印は修學卒業生）

製絲講習科別科

佐賀縣△浅井　みき
宮崎縣　加茂　まさ
長野縣　沼賀　ダイ
山形縣　五十嵐ツル
福島　そよ
山形縣　高野　たけ
靜岡縣　和泉　すが
愛知縣　きよ
山形縣　五十嵐のぶ
長野縣　大田みさを
高知縣　秋澤　雪尾
山形縣　高野　たけ
靜岡縣　和泉　すが

新潟縣　佐藤　牧造
群馬縣　笠原慶三郎
埼玉縣　佐倉　正吉
熊本縣　菊池吉三郎
長野縣　千葉　成七郎
長野縣　丸山　舜一
新潟縣　高橋　重吉
靜岡縣　飯島善太郎
長野縣　須橋　勝造
山形縣　荒木　柳司
靜岡縣　永井　碩庭

養蠶諸習科別科

東京府　井上　長吉
山形縣　鈴木　俊雄
赤澤　榮輔
鳴海米次郎
栃木縣　瀧澤　庄吉
群馬縣　仁藤　庄六
千葉縣　河野　喜秀
山梨縣　宮澤　庄吉
群馬縣　關口　喜一
東京府　日野　得一
群馬縣　小澤太矢
山形縣　木村　久治
長野縣　有賀　政清
長野縣　青森縣　志村　房雄
東京府　嚴手縣　東郷　美穂
山形縣　安藤銀次郎
東京府　本多角次郎
東京府　川崎　昌晟
東京府　千葉縣　及川政太郎
茨城縣　下村安次郎
長野縣　秋田縣　孝三
新潟縣　加藤　源佐
青森縣　工藤　榮吉
小野　篤治
嚴手縣　宮澤傳次郎
青森縣　千葉　音八
山梨縣　山梨縣　久作
山形縣　廣瀬　百藤
東京府　本多角次郎
長野縣　埼玉縣　高橋　庄作
宮城縣　松田　孝三
山梨縣　松本　太郎
長野縣　長東喜代春
埼玉縣　荒井庄太郎
宮澤傳次郎
宮城縣　高澤　音八

卒業生姓名

養蠶諸習科本科

●沖縄縣養蠶業景況

本縣の養蠶業は一二小離島の外從來の習慣なく又當局者に於ても專ら試驗のみに從事し居りたる爲め斯業の發達甚だ遲々たりしも明三年以來新縣の將來に於ける卒業生の信用に關し本多角次郎の力説に依り漸次なれども大にしては即ち吾國の製絲業に及ぼす所のもの決して無心にあらざるべし今日以後社會に出でゝ新業の改善發達の途は主として諸子に依らざるべからずと雖も抑々本當卒者の一致協力に俟つ所のもの頗る多し願へからずと雖も抑々本當卒者の一致協力に俟つ所のもの頗る多し願へ

習慣なる離島久米島より其他本島井に八重山島地方も追年進歩の情況なり

本年の擬立は二月下旬より三月中旬に亘り其間三四飼沿は降雨打續きしも卒ひにて冷氣なりしと五飼より上飼に至り氣候順調に復したるを以て桑葉の發育特に宜敷ふり以て一般豊作が受けり蚕繭等品は一升に付十三匁五厘上蚕量を出し下地蚕のみ一升に付十匁を以上蚕量を出し下等は上蚕は不足なりき而も繭高は未詳なれども內

んことを要す而して從來博覽會、共進會出品上の弊害として世人が目睹せし特に苦辛慘憺良品を造くることを止め、此の品なれば幾多の注文あるも之れに應じ得らるゝてふ物を出陳するこそ望しけれ送心を一言

●澤村農學博士の論文

農科大學助教授農學士澤村眞氏は論文を提出して首尾能く農學博士の學位を得られた、其論文の數は都合七編で蠶業に關係あるもの二つ、一は鱗翅類の消化酵素に關する研究、一は軟化病に關する研究である、さて此等に就ては同博士に請ふて本會報に掲載する筈であるが、不取敢軟化病に關する研究の點が官報に記されてあるから紹介しよう、

軟化病に關する研究

本編は軟化病の原因に就きて研究したるものにして最初の試驗に於ては軟化病蠶の消食器中に最も多數に存する細菌を分離培養して之を桑に塗り蠶に食せしめしに還元低ければ病を發することなかりしに之に反し濃度高きときは細菌を放さらに食せしめざるも軟化病を發せし故次の試驗にては以上の細菌の外枯草菌、馬鈴薯菌等をも肛門より腸中に注射し還室に於て蠶を飼ひしに何れも普軟化病を發せり又以上細菌の培養液を「チャンバーラン、F」濾過器に通過して之を肛門より腸に注射せしに其結果は蒸餾水を注射せしものと異ならざりしが故に軟化病は特殊の「トキシン」の爲めに起るものにあらざるを知れり然れども前述の細菌は桑葉の煎汁に於て遊離酸類と亞硝酸鹽とを生ずるを以て此二者の作用を驗する爲め各其少量を腸中に注射せし所軟化病と同一き徴候を呈して斃れたり次に軟化病を起すべき細菌は何處より來るやを知らんが爲め桑葉を檢査したるに一病者の球狀菌を分離し其後蠶の腸中に注射せしに何れも軟化病を起し又此等は前に病蠶より分離せし球狀菌と同一なることを確一めたり以上の試驗は前後十回の多きに渉れり而して著者は有試驗の成績に據りて次の如く結論せり

一　軟化病は消化器內に細菌の繁殖するが爲めに發す

二　軟化病蠶の消化器內に細菌は通常數種の球狀菌と二種の桿狀菌とにて最多の場合には球狀菌のみ存するか或は同時に少數の大桿狀菌を存す小桿狀菌と混ずること多く單り存する場合少し此外少數に存する細菌は其數少なからず

三　大桿狀菌は Bacillus Megatherium Ve Burg にして小桿狀菌は「メガテリウム」又球狀菌は Micrococcus Pliqge なり

四　蠶卵內にも球狀菌と桿狀菌とを存することあり桿狀菌は「メガテリウム」又球狀菌は Micrococcus Pliqge なり

五　桑葉には常に數種の球狀菌附著す著者は十種の球狀菌を分離し其中九種を以て試驗せしに皆軟化病を起せり病蠶の消化器より分離せしものは桑葉より分離せしものと同一なり

六　此等の細菌の桑葉に附著して蠶の消化器內に入れども蠶の健康なる間は盛に繁殖するを得ず然れども蠶を高濃に飼ふか又は消化器に壓迫を起さしむれば細菌忽ち繁殖して軟化病を發せしむ又病蠶に球狀菌多きは此種の細菌が最も多く桑に附著すればなり

七　故に軟化病は特殊の細菌に因りて起さるものにあらず

八　軟化病は「トキシン」に由りて起るものにあらず恐らくは細菌の生産する遊離酸類亞硝酸鹽若くは「アムモニヤ」の中毒に由りて起るものならん

之れを要するに本論文は軟化病には特殊の病原菌なり其原因普通桑葉に附著する Bacillus Megatherium, Micrococcus Pliqge 等の蠶

臭生理的變動に際し消化器內に繁殖するにありとの一新說を發表せるものなり

それて軟化病には特殊の病源菌なしとの結論であるが去年の今日は軟化病菌を發見し夫れが論文の主なるものにて博士の學位を得た學者もあり、本年の今日は軟化病に一定の病原菌なしてふ論文にて博士の榮稱を擔ふた學士がある、何んと奇觀ではあるまいか、吾人は迷宮に入らざるを得ない、今一段學者の精究を煩し此疑團を氷解して貰ひたひ。

●東北地方の養蠶

盛岡に新設せる高等農林學校の養蠶主任たる大森農學博士は本年蠶兒を飼育したる成蹟を公にして三種（實玉、又昔二種平均蟻量四匁に對し一石四斗三升六合（十六貫二百七十六匁）を得たりと稱し此好果を告げたる原因を蠶室蠶具の新調なる爲清潔にして傳染病的微生物を藏ざざると、比較的蠶種の良好なること、飼育の佳良なることゝ東北地方の育蠶に適することに歸着せり

●蠶絲業は富豪の業として不適なる乎

前には本邦の二大富豪として有名なる三井家は折角經營せる製絲業を棄げて放擲し今又大阪の大立物たる佳友家は滋賀縣に設置せる製絲場を他に賣却せり是れ製絲業は富豪の經營に適せざるに依る乎否乎

●中外商業の蠶業奬勵策

蠶業と農作てふ命題の下に中外商業子は四日に亘りて蠶業奬勵策を論ぜり今左に要點を摘んで參考の資となさん

一　本邦の農業は合衆國米作の物價と巴那馬運河の開通と共に其基礎か危殆に瀕す

二　米作に代るに蠶業を以てするか得策とす何となれば世界の他の方面に於ては蠶業發達科目期すべからず殊り東洋の日本と清國のみなれと雖も清國の生絲は品質粗惡にして世に重きを置かざるを以てなり

三　蠶業を盛なしめんと欲せば國家は他に稅源を求めて桑園の租稅を全廢すべし

四　桑園殺なく隣山林原野及び牧場の一割并に田畑の五分を桑園に變更すれば桑園の現在の三倍餘一百萬町歩となり四億五千萬圓の生絲を產出する絕大の蠶業國たらん

又以て一種の方策なりと謂ふべし

●博覽會に於ける受賞者（承前）

一等賞

東京府	成瀧社蠶と飼育方案に蠶種	成瀧社	群馬縣
京都府	蠶 天田郡蠶絲業組合	同	下仁田社
兵庫縣	生絲 水上共同社	同	蠶種繭 町田菊次郎
埼玉縣	蠶種繭 木村九蔵	同	蠶種繭 高山武十郎
同	蠶種繭 野本治兵衛	同	繭 黑澤貞吉
同	蠶種繭 木村豊太郎	愛知縣	同 津田算
同	蠶種繭 浦部良太郎	同	生絲 合資會社三井社
同	生絲 甘樂社		

愛知縣　生絲　細谷製絲株式會社　福島縣　繭　大橋　齊
靜岡縣　繭　宮川幣米　同　同　氏家忠作
山梨縣　同　堀内其之亟　同　同　淺野德右衛門
同　同　小野治甫　富山縣　同　藤澤五三郎
岐阜縣　同　篠原產助　鳥取縣　生絲
長野縣　同　山崎和作　同　同　米子製絲合名會社
同　同　原六右衛門　山陸製絲合名會社
長野縣　同　工藤善助　島根縣　繭　荻川郡平田町
同　生絲　開明社　同　生絲　繭種改良組合
同　同　合資會社松葉軒　山形縣　繭　平田興業株式會社
同　同　合資會社谷製絲會社　同　生絲　金田平三郎
宮城縣　繭種　八巻雄三郎　同　同　多勢龜五郎
同　生絲　米屋製絲場　愛媛縣　生絲　長谷川五三郎
河野喜太郎

●人事彙報

▲農學博士酒勾常明氏　本會參事農務局長農學博士酒勾常明氏は今回正五位に叙せられたり

▲農學博士澤野淳氏　性質溫厚學殖豊富農事試驗場長として其職に盡瘁し大に功績を揚げ本會の爲に一臂の勞を頒たれたる農學博士澤野淳氏は二堅の倦す所となり遂に逝去せられたり斯業界の爲洵に痛惜の至に堪へず茲に謹て哀悼の意を表す

▲本多岩次郎氏　本會參事なる蠶業講習所技師農學士本多岩次郎氏は今回澤野博士の後を承けて東京蠶業講習所長を命ぜらる實に該所の爲良所長を得たるを悅ぶ

▲農學博士大森順造氏　本會技藝委員なる盛岡高等農林學校教授農學博士大森順造氏は今回正七位に叙せらる

▲足立元太郎氏　本會技藝委員牛絲檢査所技師なる農學士足立元太郎氏は今回高等官四等に叙せられたり

▲辻暢太郎氏　本會技藝委員にして蠶業講習所技師なる農學士辻暢太郎氏は高等官五等に陞叙せらる

▲今井保一郎氏　本會特別會員として山梨縣技師なる今井保一郎氏は高等官七等に叙せられたり

●●新刊豫告●●

農科大學助教授　農學博士澤村眞先生講演

蠶兒軟化病之研究

全一冊　洋裝採色　石版二十　九版挿入

本書は農藝化學者として眞摯篤學の名、高き澤村農學博士の研究報文にして曩に英文を以て農科大學々報告に掲載せられたるものなるが今回農科大學助手山崎德吉氏の平易流麗なる筆により更に邦文を以て世に紹介せらる、博士の研究は之を從來世上の研究に比すれば百尺竿頭更に一歩を進め本病幾多の疑問に向つて一大解決を與へたるもの、想ふに結果の及ぼす所頗ふる大なるべし、今回弊堂請て之を印刷に附し廣く世に頒たんとす、斯業に關係の諸士は必ず一讀せざるべからず

追而本書は目下印刷中に付き製本出來及代價の通知を望まるゝ諸君は葉書にて御申越置被下度出來次第直に御報知可申上候

發兌元　東京市神田區美土代町三丁目十四番地　明文堂

種類正確　生育保險　桑苗大販賣

種類

白部早生
島村早
上州市平
鮫
田八
平治
博七
驛
小牧銀塗
青山高
中高助
元右衛門十
接木用實生
文字
代出し草料
各種

早一桑茶色早生黑早桑兵右衛門大葉六郎椿
內田早鬼早生白桑石磐冶北原早生甘
相撰伊太利亞凱桑綾錦老人島矢

柳川節曲大縮織
重田桑市伊達市平辨
砂川節曲桑青信島早濃
大青桑市平九
胡桑上芝東太菊
多邑州桑木板龍
蕉早桑大和巢
赤六枝東奥
詳馬赤木早四青
丸葉生ツ
十文目輪
字字相木
細小大
寶
江幡球撰四高橋
黑鼠芝方
鯛返崎俠桑
伊勢城
魯桑實文字
生蔵

●西夕原東京蠶業講習所見本園中無比之良種撰擇

種類

●桑樹苗木仕立適桑

伊國及甸牙利國栽培法高田刈政は本邦秋田刈支那五層十六幹仕立刈法の類

種類　富貴桑　熊　長　金子　赤木　大
伊太利亞　櫛　島中　澤豊羅　瀬孝彦次郎丹波木鳥居原左伊達

注意

見本試植苗として少數御入用の向は表中外各種類澤山にあります御入用なるときは御照會次第御回答申上候

農商務省東西蠶業講習所

東京新宿停車場前淀橋町角第壹番地

御用達桑苗社

春蠶種　夏蠶種　甲斐特產種　秋蠶種　國益親玉霜下蠶種

小石丸白玉銀白青　熟中巢
六月十五日發蛾仕候
六月八日より發蛾

一化性　秋蠶　風穴種　八月下旬迄何時にても出穴
七月十五日より八月二十日迄引續き製造仕候

八月廿五日より九月十五日迄
付一枚金五拾六錢平製一枚
十八枚以上割引仕候
五十錢但十枚以上割引仕候
原種用二十錢平附
代價　山梨縣東山梨郡岡部村字松本石和局區內（青嶋スカ）大日本蠶絲會員

旭館主　菅沼周平

廣告

賣捌製造販賣

春蠶種類

青熟	又昔
絲量種多	一升飼育平均繭量多
一升飼育出絲量二百貫目	繭質平均多

桑弓園

割引方あり

一枚付一錢三銭　一圓五十錢但し代價原種用平附

松井邦治

白龍種元祖

信州本場蠶種御要望の方は御申込相成度候

白龍○小石丸○又昔○姫蠶
青熟○精選以て貴需に應ず

郡長瀨村

白龍館

無毒保證

春蠶種

信州小縣

郡長瀨村

白龍館

健全無毒蠶種販賣廣告

○種類（春蠶）

長巢、白綾、又昔（秋蠶）

○白龍○富士○以形（一升粒數二百六十粒）

○代價

春蠶　特別製　原種用　壹蛾　貳錢五厘
秋蠶　原種用　平附　壹蛾　貳錢五厘

○受賞意

第七回關西府縣聯合共進會四等賞
第八回全府縣に於て大高評を博し昨年は各府縣に於て外の御注文或は御照會を蒙り候段奉深謝候然るに弊會に於ては限りある製造額にして遺憾ながら折角の御需めに應し難く謝絶せし向も不少由て本年は一層業務を擴張致し江湖諸君の貴需に應すべき考へにて共前記申込期日に後れざる樣御注文仰付られ度奉希望候也

○代價

但し共同購入又は取次販賣望の方は特に割引の御相談に可應に付御一報被下度候

京都府丹波國何鹿郡綾部町

蠶種業　主事　開進會　西村源之助

佐々木長淳先生序文　峰村喜藏先生譯述

支那蠶書萃編

峯村先生は清國政府の聘に應じ久しく蠶業教師として支那に在り教授の傍ら專らと支那蠶業の狀態を調査せられ任滿ちて歸朝せんとするに當り本邦政府は更に氏に托するに清國內地蠶業巡視の事を以て爾來氏は又至る處に於て研究し得たる所自らの獨特の妙技を本邦蠶業家に知らしむるの甚だ有益なるを察し則ち本書を萃錄して之を第一編に編纂せり蠶業古來の沿革は最も趣味多き蠶業の有益なる者を詳說し次で四川省に於ける最も重大なる江蘇浙江兩省に於ける蠶業の狀態及び蠶桑上の要項を記載し第三編には蠶桑實濟況本篇は支那蠶業の沿革概述せるもの

上下一冊編　上編　第一編　第二編

蠶桑問答　蠶桑實濟

蠶桑說　蠶桑萃編

蠶桑萃編と稱する大部の蠶業史及支那古來の有名なる蠶書を摘要して其萃を集めたる珍本也更に蠶桑の歷史より始め飼育法は一字千金に値する要領細大漏すなく百有餘個の挿繪を載せ一見支那蠶業の有樣及其の方法を最も加ふるに白く會得するを到底本邦蠶業の及ぶ所にあらざるなり

發兌元　東京日本橋箔屋町十四番地　丸山舍書籍部（特電話本局二千八十五番）

總クロース製上下二冊（紙數八百頁內外）●上編壹圓　下編壹圓小包料壹錢　上下共小包料十錢　二冊共小包料壹錢

此價格は御注文の節は小包料を負擔可仕候

秋蠶專攻上條銀一郎先生著述

新版

最近秋蠶全書

全一冊　總クロース製本菊判四號活字精圖入

●定價四十五錢●郵稅六錢

農閑の時に當り面も枯落すべき桑葉を利用して秋蠶を飼育するは蠶業經濟上最も得策たり然れども其方法を究めずして猥りに是を飼育なす試むる時は爲めに桑葉を無駄に帰て所業を苦痛せしむるの恐れあり本書茲に見るあり今山秋蠶專攻の人として有名なる上條先生に乞ひ本書を公にすることなせり本書記する處所業全般に亘ると云へども蠶の育理法、原蠶の飼育法、秋蠶種の製造法、秋蠶の飼育法、桑葉應用法、害蟲蠶業防法、等は最も詳說せられたるものにして行文平易婦女子と云へども解し易き良書なりと見て秋蠶の飼育して興味なる結果を收めんと欲するの士は乞ふ一本を座右に見へられんことを

農學博士大森順造先生著述

最新出版

蠶病學講義

精圖數多挿入　實價八十五錢　郵稅十錢

蠶兒にも亦人類の如く病氣あり從て之れが豫防消毒治療等の方法を心得ざれば豐收を望むべからず本書は博士の專攻に關するもの特に言文一致體なれば婦女子と雖解し易き通俗的良書なり

東京蠶業講習所講師三谷徹先生著

最新出版

製絲秘術

精圖數多挿入　定價六十五錢　郵稅八錢

凡そ製絲の業は職工の技術に依るもの極めて多きに鑑みは著者が從來蠶書の內に斯の技を究めたることなせり爲め著者乞ふて本書を公にすること茲に著者の學理に精なる經驗に富める其秘術を說き盡して餘蘊なし特に意を工女の教育に致し行文平易事理簡明なるは本書の特色たり

長野縣油井彌一郎先生著述

第四版

夏秋蠶之燈

ふなづ付　實價五十五錢　郵稅六錢

夏秋蠶飼育の鴻利ある漸く世人の知る處となり近來日々其飼育に係る著書の照會切なり本書は著者多年斯業の經驗より發見せられたる斯の經濟飼育秘法を以て嚆矢となす綱羅せる良著にして廢桑利用上本著を以て嚆矢となす茲に回答に換ゆ

東京京橋區南傳馬町二丁目

發兌　書肆　有隣堂

第五回内國勸業博覽會

山梨特産 風穴秋蠶種豫約廣告

本館は蠶業界現時の趨勢に鑑み益々奮勵以て精良蠶種の産出に力め大に斯業に改良を企圖せんとす大方の諸士希くは倍衆の御愛顧を賜らんことを

蠶種 一等賞牌受領

(營業要項)

種類。青熟中桑普通製全面付金壹圓五十錢、原種用桐製二十八蛾付金七十錢

代價。割引。枚數多きに從ひ規定の割引をなす組合團體の共同購入は特に割引すべし

(詳細は御照會次第直に回答す)

豫約金。御注文の際普通製は一枚金五錢桐製は一枚金三十錢宛御送付を乞ふ

爲替。送金は甲斐國一丁田中郵便局取組のこと

出穴期。七月上旬より八月中旬迄數回出穴すべきに付豫め御指定を乞ふ

春蠶種 風穴種 製造 松同館養蠶場

館長　西ヶ原出身監事　堀内甚之亟

(電信略號ホリ)

代表　永金太郎

關口種甫

蠶書。風穴秋蠶の飼育法は本館蠶事代永金太郎著風穴秋蠶說に記述せり御一讀を望む(甲府市柳正堂發賣)

山梨縣東山梨郡日川村

本館は中央線日下部停車場を距る東南約二十五町にあり

健全 免疫性 春蠶種

蠶種の良否は養蠶の豐凶に關すること大にして養蠶の豐凶は蠶種の健否に因て支配せらるゝものたることを知らば蠶種の撰擇豈忽にすべけんや本會深く之を憂へ特に蠶種部を設き奮勵以て健全免疫性の蠶種を製造可仕候間多少に拘らず御飼育相成度奉願上候

名稱　大巢之部　中巢之部　白龍　角又　大又　豫約代金　原種用種百蛾金貳圓　製絲用種一枚金一圓卅錢　白姫　閏也

割引法拾枚以上一割◎多數は御照會を乞ふ

爲替振込局　下總國守谷局

豫約期限　七月卅日限り

蠶種御希望の諸君は蠶種代金の二割以上を添へ申込むべし

茨城縣北相馬郡高野村九十二番地

大日本蠶業研究會蠶種製造部

電信略號(サン)

健全 無毒 四化發蠶種

本會製造の四化蠶種は蟲質强壯解舒容易に絲質善良齟形大にして一升三百顆以内の改良種なり

蠶種代金　原種用種百蛾金貳圓也　製絲用種一枚金一圓廿錢也

第二化期　七月十日より九月卅日まで　製種

第三化期　八月十五日より九月十日まで　製種

蠶種の御希望の諸君は代金の全額を添へ申込べし◎代金御遲延なき御申込は御斷り申候◎發生期間短期なるを以て敏速を要すればなり

割引法　拾枚以上一割貳拾枚以上一割五分引多數は御照會を乞ふ

蠶業講義錄

講義程度は農商務省蠶業講習所本科程度に準し各科目とも懇篤丁寧に講述しあれは何人も容易に了解し得らるゝなり

講師は東西兩蠶業講習所、農商務省、農事試驗場、生糸檢査所等の技師學士數十名に囑托せり何れも斯業界第一流の大家たるなり

試驗問題と答案は本誌に蠶業講習所及各地著名養蠶學校の試驗問題答案を毎號掲載す

學資貸與中の學資貸與の一大恩典あり向フ一ヶ月間此廣告添付申込に限る

入會金半減

發行所　東京市本郷區曙町拾六番地　大日本蠶業義會

會費　毎月一回發行　白二十頁　一ヶ月金三十錢　同十ヶ月金二圓八十錢　同廿ヶ月金五圓五十錢　見本料一冊金三十錢　入會金五十錢　郵券代用壹割增　講習期二ヶ月

會員大募集

第拾貳號　規則書　第拾貳號は無代進呈　既刊初號より取揃ひあり

蠶業新報

毎月一回發行第百廿四號八月廿日印刷　定價一部送料共拾貳錢　十二冊前金壹圓廿錢　郵稅無料　東京市中央區切手町

清國繰絲寫眞○故澤野博士及本多岩次郎君肖像

蠶種檢査法如何廢存の議……同會幹長　高木伸二、三等賞）二篇全載

蠶絲試驗場設置の議……同會幹長　高木貞一

蠶種一班附日本繭改良論……橋本信三

支那繰絲法研究……東京蠶業講習所技手　三谷信

柏の方飼育……東京蠶業講習所技手　三谷信

東北蠶と風穴……農學博士　佐々木忠次郎

新秋蠶興論……宮入良右工門

蠶種製造者に告ぐ……長所及短所を論ず……大森順造

日本蠶種……相馬愛藏

夏秋蠶作の將來と養蠶……橋本重兵衛

米貯藏……鵜泉宅治

種蠶の必要……三田治太郎

澤山の英文……城北生

農學士の英文……城北生

博士の英文……城北生

保護の英文……城北生

蠶病論……城北生

卵化子……城北生

胚子の發達に就き……城北生

外國電報……藤富次郎

生糸檢査所……澤亀太郎

取引と外國……三澤城東生

絲價名會……三澤城東生

東京蠶業講習所卒業者……

新任本所長……

東京蠶業講習所……

福島蠶業講習所長……

故農學博士澤野淳君の傳……

故蠶種……記

故中村佐平次翁の傳……

佛國蠶業全書（譯文）……佛國……ラルブセー

●有の外蠶業家庭世界評論雜報等實益の記事を載せ

●毎月一回發行

●佛國蠶業全書（譯文）

●蠶業新報

●蠶業新報社

東京市日本橋區舊屋町

發行所

發賣元

本器は內壓桐外匣松材より成り周圍は金屬を以て張り又其上は美麗着色の分は外匣松材內匣に「桐材」蠶種挿入器「桐材の製造の部分は不導熱體物を用ひ三重一但し別式の三重より成る數個の諸金屬製附着」より成りたるもの

にて其外匣と蠶種の周圍に空隙を充塡すべく底部に空隙を有する錦屏等を用ひ働を有する蠶種を貯藏する空中の下底とし蠶種を不時に寒冷期間を冬期蠶を瓦斯を沈澱せしめ温暖を防ぐ

安全無事に越冬し健全の發生を爲さしむべき樣構造宜に隨ひ受く●運送は小包便にては送れず通運其他各便

發賣元　東京市日本橋區舊屋町十四番地　丸山舍

五圓五十錢　四十五圓　百枚入　四十圓　別式製　別式金　廿枚入　二十圓　三十枚入　五十枚入　四十枚入　三十枚入　十五枚入　十錢　四錢　五錢　十錢　貯藏器　代價　荷造費

新刊蠶業書廣告

栽桑教科書

洋裝本綴全一冊　定價金五拾錢　郵稅金八錢

農學士　田渡繁胤　著
生産學士　石橋敬次郎　著
農學士　高田穣二郎　著
石川農學士　本書に序して曰く、現今蠶業に關する著書甚だ少しとせず、然れども多くは生産學士の事項に拘はらず、其程度切のものなるに、本書は實に栽桑に關する最も亦蠶業上の根本なり、蠶の生産は桑葉を以て主となすこと、所謂桑の營養體の強弱、順ふて蠶の繭糸の精質及成繭の粗密等の制度に關し、之を桑の適否に需ずるに、桑の良否は蠶の成育及栽桑と相俟て其効果を全ふせしむるに、桑を栽培すること多大なる經營を以て見れば、飼育は栽桑の大要素たるを編せざるべからず、誰か兩者の間に軒輊あらんや、今本書は之を分つて栽桑と飼育とに二編とし、各其要を簡明に敍述し、飼育の方は蠶の生理を明にし、其要を簡明に敍述し、飼育の方は蠶の生理を明にし、其要を簡明に敍述し、飼育の方は蠶の生理を明にし、

精良　春蠶種　又昔　大亦　青熟　光澤丸

右原種用種及製原用種共御注文に可應候
御一報次第代價其他詳細返信可仕候

群馬縣佐波郡玉村町
興業館　原　源太郎

蠶種桑苗扶桑園

信濃國小縣郡鹽尻村

一化性　又昔　青熟
二化性　〈越年種〉玉稀、玉龍、文錦、

寒國產强健性蠶種

岩手縣二戸郡福岡町
黑澤助右衛門

第五回博覽會二等賞受領

春蠶種　種類　銀白　又昔　小石丸　改白　白龍

右多少に係らず御購育の程奉願上候
詳細は御照會を待て御回等可申上候

長野縣小縣郡鹽尻村
沓掛吉郎次

健康蠶種の御披露

弊館は文化年間の創業にして專ら世の進度に從ひ適切なる改良を加へ●春夏共に秋蠶代用の貯ひ蠶種共健康の良種を製出販賣す●農會又は多數の御購求は特に大割引の法あり御一報次第種類名稱悉しき營業案内書を呈す

武州橘樹郡稻田村蠶種製造家濟陽館主

健康蠶種製造販賣專業家
大日本蠶種帝國絲綿草繭受者
神奈川縣蠶種同業組合委員
大日本帝國實業團體員
各府縣蠶種業大販賣業

關山五郎右衛門

上毛の蠶種家

上毛蠶蟲館　免疫性◎蠶種

千木良芳郎

群馬縣多野郡新町　又昔　大小二種

◎蠶種製造販賣廣告

◎春蠶改良小石丸◎風穴秋蠶青熟多摩錦

右三種は弊館に於て多年飼育改良せしものにして能く氣候の激變に耐へ色澤形狀絲質共に佳良なり

代價　原種用種廿八枚附一枚金拾五錢
製絲用種毎一枚金壹錢參拾錢

◎受賞　◎明治廿二年西多摩郡農產品評會賞
功貳等賞　◎同廿三年第三回內國勸業博覽會等賞
◎同年西多摩郡工品評會壹等賞
八年第壹回共進會第壹等賞
成績第二回共進會第壹等賞
共進會貳等賞　◎同廿九年第六回內國勸業博覽會等賞
◎同廿年第壹回共進會第壹等賞
◎同廿年大日本蠶絲會第七回品評會壹等賞
◎同廿四年大日本蠶絲會第六回品評會貳等賞
◎同廿五年大日本農民會第八回共進會貳等賞

代金　總て前金を要す、荷造費運賃は本館の負擔とす、替は武藏國羽村郵便局宛振込の事

割引　原種用種製絲用種共拾枚以上五分、拾枚以上壹割五分、壹割引の事

發送　着金順に依り春蠶は本年九月下旬より秋蠶は明年七月下旬より製造販賣仕り候間多少に不係御注文被仰付度奉希望候也

右例年の通

東京府西多摩郡福生村
福榮館主　高崎治平　電信略號　タカ

第四回　第五回
內國勸業博覽會
精撰春蠶種
有功壹等賞
信州小縣郡丸子村
工藤善助

東京蠶業講習所技師　林覺作先生校閱
東京蠶業講習所講師　岩淵平介君著述
長岡哲三君著述

通俗蠶病豫防法

全一冊　實價金五十錢郵稅金六錢

右御望の方は御申込相成度候也

大日本蠶絲會

TABLEAU DU MOUVEMENT DES SOIES REPARTIES EN DIVERSES INDUSTRIES.

TABLE OF MOVEMENT OF SILK IN DIFFERENT INDUSTRIDS.

(Juillet 1903.) (July 1903.)

		Report.	Brought over.	Arrivé.	Arrived.	Vendu.	Sold.	Xporté.	Exprd.	Renvoyé.	Sent back.	A'reporter.	Brought forward.
		Piéds.	Piéds.	Piéds.	Piéds.	Piéds.	Piéds.	Piéds.	Piéds.	Piéds.	Piéds.	Piéds.	Piéds.
Filature.	Filature.	1.115		7.698	3.327					258		5.229	
Zagugi.	Reeel.	147		1.224	713					2		675	
Kakeda.	Orikayoshi.	2		358	104							255	
Autres.	Other.	5										5	
	Total.	1.270		9.360	4.144			3.720		250		6.164	
	1902.	2.120		8.344	4.018			1.607		330		6.124	

丸山舍京阪支店廢止

殘暑今以て難去時節に稱道微自難し赴き緣す京に阪の擔ら二斯個所に支店設置し來江湖諸賣倉候扱弊合儀夙
深く感謝しめる顧慮客に候の勢然し時設支を店設置し供せ欲すと主眼欲し貨が物浴る處に
迅速ならず支店に於げ殊一世一客に部の運進品歩切一層の當時金支を供せ缺すと主眼欲し貨が物浴る處に
しに支店に於げ殊一世一客に部の運進品歩切一層の當時金支を供せ缺すと主眼欲し貨が物浴る處に
とせずず同一斜間と金と相成地數等爲弊含支其迅速を設置試常時逢對しが、今日取次發れり送樣に徹亦鄙近
不便はず膠實なと金と相成地數等爲弊含支其迅速を設置試常時逢對しが、今日取次發れり送樣に徹亦鄙近
のを尤も韓なる具の世時給際又年の爲弊含支其迅速を設置試常時逢對しが、今日取次發れり送樣に徹亦鄙近
來清は、雖、供に給を霞微具前爲弊含支其迅速を設置試常時逢對しが、今日取次發れり送樣に徹亦鄙近
支店利益を設置の必要氷霞潤澤注にな力販賣店を設置試常時逢對しが、今日取次發れり送樣に徹亦鄙近
支店利益を設置の必要氷霞潤澤注にな力販賣店を設置試常時逢對しが、今日取次發れり送樣に徹亦鄙近
ち誤拂を見るる雜、氷霞潤澤注にな力販賣店を設置試常時逢對しが、今日取次發れり送樣に徹亦鄙近
宿て海外の支店の利益を設置の必要氷霞潤澤注にな力販賣店を設置試常時逢對しが、今日取次發れり送樣に徹亦鄙近
於て海外の支店の利益を設置の必要氷霞潤澤注にな力販賣店を設置試常時逢對しが、今日取次發れり送樣に徹亦鄙近
倍給はりたる要地に支店を設置せんことを期すも亦取て他意あるにあらざるなし永年愛顧を垂恩を來にし爲充めに

進て弊舍**京都支店**及**大阪支店**は本月廿五日限り**閉店**致候に付**以後**凡て本店へ直接御注文被下度候尚今日迄兩支店に於ける**取引**上の**事務**は一切**東京本店**に於て**取扱**申候

明治三十六年
八月十五日

東京市日本橋區
箔屋町十四番地
舍主　竹澤章

丸山舍本店

御得意諸君貴下

TABLEAU DU MOUVEMENT DES TOIES RÉPARTIES PAR JOURS.

DIAGRAM SHOWING DAILY MOVEMENT OF RAW SILK.

Jours. Days.	Soie. Silk. Arrivée. Arrived.	Vendue. Sold.	Renvoyée. Sent back.	Exportée. Exported.	Prix moyen. Standard Price. Filature. Hosoito. Extra. No. 1		Filature. Futoito. Extra. No. 1		Zaguri. Rereels. Extra. No. 1		Kakeda. Orikayeshi. Extra. No. 1		Maximum du prix. Highest prices. Noms des filateurs. Names of filaturs.	Prix. Prices.
1	*Piculs.* 183	*Piculs.* 51	*Piculs.* 21	*Piculs.*	*yen* nom	*yen* 1072½	*yen* 1090	*yen* nom	*yen* nom	*yen* nom	*yen* nom	*yen* nom	Yodasha.	1035
2	218	47	7		„	„	„	„	„	„	„	„	Mikawaseishijō.	1080
3	196	71	7	226	„	„	„	„	„	„	„	„	Fujikiodō.	1062½
4	256	38	3	50	„	„	„	„	„	„	„	„	Tenyūsha.	1035
5	303													
6	150	42	34		„	„	„	„	„	„	„	„	Kōseikwan.	1040
7	234	20	23		„	„	1070	„	„	„	„	„	Hakukakusha.	1032½
8	195	105	11	10	„	„	„	„	„	„	„	„	Kioshinsha.	1012½
9	247	155	9		„	„	„	„	„	„	„	„	Imaizumiseishijō.	1055
10	416	113	18		„	„	„	„	„	„	„	„	Toyohashiseishijō.	1040
11	128	136	6		„	„	„	„	„	„	„	„	Fukusensha.	1045
12	172													
13	102	103		6	„	„	„	„	„	„	„	„	Matsushirokwan.	1080
14	388	17	15		„	„	„	„	„	„	„	„	Kōyōkwan.	1070
15	3[illegible]5	92			„	„	„	„	„	„	„	„	Tenyūsha.	1020
16	368	87	10		1050	1040	1050	1030	„	1025	„	„	Hokuseisha.	1050
17	264	221	5	27	„	„	„	„	„	„	„	„	Yoshiwaraseishijō.	1040
18	258	137	6		„	„	„	„	„	„	„	„	Kōsansha.	1040
19	357													
20	272	108	9	20	„	„	1030	1025	„	„	„	„	Kanrasha.	1025
21	543	312	3		„	„	„	„	„	„	„	„	Murataseishijō.	1050
22	272	273	21	57	„	„	„	„	„	„	„	„	Usuisha.	1025
23	288	201			„	„	„	„	„	„	„	„	Higamikiodosha.	1025
24	486	117	3	929	„	„	„	„	„	„	„	„	Imaizumiseishijō.	1040
25	323	116	3	335	„	„	„	„	„	„	„	„	Usuisha.	1025
26	317													
27	143	381	8		„	„	„	„	„	„	„	„	Hirotaseishijō.	1045
28	602	275		392	„	„	„	„	„	„	„	„	Kōseisha.	1027½
29	487	411	31		„	„	„	„	„	„	„	„	Kinkōkwan.	1050
30	461	280	4		1030	1050	„	1022½	„	„	980	950	Miyanoseishijō.	1060
31	338	235	3	1.062	„	„	„	„	„	„	„	„	Atakoseishijō.	1070
	9.300	4.144	260	3.720										

1 *yen* vaut envion fr. 2.50. 1 Picul = 60 kilg. environ.

The natural result in such a case would be an imperfect development of the leaves, as a consequence of which the assimilation process would be retarded and the nourishment of the new roots become insafficient and their devolopment be more and more retarded unitil at last they would be compelled to die off and the consequent deficient absorption of nutriments from the soil would react injuriously on the leaves. This may be compared to babies deprived of milk and nourished only with solid food, before the digestive organs have developed their powers. Only those plants which have effected a certain degree of developments before the exhaution of reserve materials can attain normal growth.

Marché des Soies.

MARCHÉ DE YOKOHAMA.

Citons sommairement la situation de notre marché au mois de Juillet 1903.

Comme le mois précédent et pour nous répéter, notre marché a été, pendant les dix premiers jours, très sensiblement calme. Lepetit courant de transactions que l'on a enregistré pendant la dizaine suivante semble limité à des besoins immediats. Entrant dans la dernière dizaine, on a signalé quelques affaires assez importantes, mais les prix restant stationnaires, l'accalmie a été toujours la note dominante de notre marché.

—*—

Les tableaux suivants indiquent d'ailleurs le mouvement des soies durant la période du 1er au 31 Juillet 1903.

Raw Silk Market.

RAW SILK MARKET AT YOKOHAMA.

The condition of the raw silk market at Yokohama during July last:—

In the first part of the month, the market remained dull from the latter part of the preceding month.—

In the middle part of the month, more or less transactions were effected; but the parchases made were only to meet orders which were being received from Europe and America.—

In the latter part of the month, although fairly good transactions were done, the quotations remained unchanged, and there was little activity in the market.

—*—

The following diagram shows the daily movement of row silk during the month of July last.—

materials in large quantities, corresponding, as they do, to nearly one-half of the total nitrogen.

As amido-compounds are soluble in water and easily transportable they may be conveniently used during the energetic development of the plant. Here we must not forgot that, not the whole of the nitrogen compounds contained in the stems and roots, eerves as reserve materials, but only some portions of them are capable of transformation; since there is a not inconsiderable quantity of nitrogen in the form of insoluble compounds.

The greater part of the reserve carbohydrates in the mulberry consists of starch, the presence of which may be easily demonstrated under the microscope. Forther, we can easily prove the migration of starch during development without the aid of quantitative analysis. Thus, if we examine the bark of stems or roots under the microscope, we shall soon discover that in winter and in early spring, the bark is remarkably rich in starch grains, which, on the application of iodine, cover the entire field with violet spots. But in summer, when the leaves are fully developed, we can hardly find a single starch grain under the same treatment.

The importance of reserve materials in the first stages of development is self-evident, and hardly needs an explanation, since the youngest buds can only develop by the aid of reserve materials, and even the green leaves, in their youngest stages, have very little assimilative faculty and must chiefly rely upon reserve materials until they become tolerably large. No plants can develop their leaves without the aid of reserve materials. But the precise extent to which the mulberry stands in need of reserve materials for proper development, is still open to question and must be discussed fully. There is no doubt that different plants needs different quantities of reserve materials, and if a plant contains a large quantity of reserve materials, it shows that the plants wants so much until it becomes able to assimilate the necessary nutriments from outside. Otherwise the plant would never keep in store an unnecessarily large amount of reserve materials.

As already shown in the preceding tables, a considerable amount of reserve materials is stored up in the stems and roots

of the mulberry, the greater part of which is consumed during the development of the leaves; hence there is no doubt that this plant has need of a large amount of reserve materials, and it may naturally be expected that when the reserve materials are insufficient, the plant can not attain normal development. It is an evident fact that an enormous quantity of reserve materials moves toward the growing points of the buds and roots to build up new cells, and a still larger quantity of fats and carbohydrates must be; consumed there by the energetic respiration which commences long before the new leaves are unfolded. The necessity of reserve materials will be the greater the quicker the development of young leaves, and the nutriments absorbed by the roots must be insufficient to meet the demand, as the absorptive power of the roots depends greatly upon the intensity of transpiration; and it may naturally be expected that in the first stages of develcpment, when the leaves are very small the absorption of the nutriments must be very slow and thus makes the necessity of reserve materials still more urgent.

According to some recent investigations, proteids can be formed from amido-compounds or other inorganic nitrogen compounds (ammonium salts or nitrates) in the absence of light, although much more slowly than in full day-light; the amido-compounds seeming, when the light is imsufficient, to be far more conveniently used then the ditrates for the synthesis of proteids.

It is therefore very probable that the amido-compounds, which are present in the steams and roots of the mulberry, are far more efficiently and quickly used for the formation of new proteids in the growing roots and in the buds where light has no access, and can never be replaced by the inorganic nitrogen compounds absorbed from the soil.

As can be seen from the tables, the root-bark of Tokasuke and that of Tsuruta and Jūmonji contained on May 18 and 29 respectively (the dates of cutting) only very little reserve materials. The new shoots are therefore compelled to commence their development with a very scanty source of reserve materials, so that it may sometimes happen that the reserve materials become exhausted before the new leaves can duly perform their function.

CONTENTS.

Contributions:

Summary of sericulture ..... *Nogakudaikushi*, T. Sakō.
On the tussah silk th eads ..... *Nogakushi*, H. Nakamura.
On stifled and dryed cocoons ..... Y. Babu.
On the classification of silkworms ..... *Rigakshakushi*, C. Sasaki.
Examinations On the grasserie disease ..... *Nogakushi*, T. Miyahara, T. Yamdai.
On the encouragement of rearing of silkworms produced in Autumn ..... S. Tate.
Sericulture in Aomori and in five other Kens ..... *Nogakushi*, H. Nakamura.
Report of investigations on the mulberry dwarf troubles ..... *Nogakudaikushi*, U. Suzuki.

Miscellaneous News:

Inspection of the Funketsu at Somaguchi in Yamanashi Ken.
Summary of invention of tools and instruments and patents granted thereon in respect of the sericultural industry.
Summary of conditioning of silkwoem eggs during 1901.

Statistics:

Diagram showing rise and fall in Imports and Exports of raw silk and silk piece goods during June 1903 compared to the same month of the preceding year.

Queries and Answers:

Re suitable season for grafting.
Re Vgimiy sericaria.
Re silkworm nursery rooms.
Re manner of distingisling cocoon in which vgimiy sericaria attaches.
Re made of building *Funketsu*.

Raw Silk Markets:

Yokohama market.
New york market.
Lyon market.
Milano market.
Shanghai market.

Foreign News:

Sericulture in China.
Sericulture in America.
Import of Chinese double cocoons.
Sericulture in Siam.
Rearing of silkworms in American.
Raising of silkworms in Africa.
Question relating to taxas imposed upon the spindle of threads in America.

Gneral News:

Expert in silk business, etc, etc.

Contributions. Opinions.

Report of Investigations on the Mulberry-Dwarf Troubles—a Disease widely spread in Japan.

BY

Nogakudaikushi **U. Suzuki.**

(*continued*)

The above tables clearly show that the reserve materials in the roots and steams undergo a very remarkable change during the development of leaves in spring. The greater part is transported to the growing parts, especially to the leaves, and there used partly for the formation of new cells and partly for the respiration process. Thus we see that in summer, when the leaves are in full growth, the roots and stems contain only very little reserve materials, but in astumn, the assimilation products formed in the leaves, again come down to the steams and roots and are there stored up to provide for future growth. Such a process is quite natural and every plant follows the same course; still there obtains a great difference in different plants, as to the quantity of the reserve materials and the rapidity of their migration. Some plants store up large quantities, which others contain very little. These differences must naturally exist not only among plants of different species, but also among different plants of the same species.

The reserve materials in plants are generally fats, carbohydrates and nitrogen compounds, but in the case of the mulberry, fats seem to play no important rôle.

It is a remarkable fact that non-albuminous nitrogen compounds (most probably amido-compounds) are contained as reserve

大日本蠶絲會報第參百拾五號

BULLETIN

DE

L' ASSOCIATION SERICICOLE DU JAPON.

No. 135.

25 Aout 1903.

SOMMAIRE.

Opinions:

Sur la situation générale de l'industrie soyeuse ..... *Nogakshokshi*, T. Sako.

Sur le tussah ..... *Nogakshi*, H. Nakamura.

Sur les cocons secs étouffés ..... Y. Baba.

De l'unification de la race des vers-à-soie ..... *Bigakuhakoshi*, C. Sasaki.

Études sur la cause de la maladie de graserie ..... T. Miyahara. T. Yauchi.

Sur l'encouragement à l'élevage des vers d'automne ..... S. Tate.

Discours sur la sériciculture à Aomori et aux cinq autres préfectures ..... *Nogakoshi*, H. Nakamura.

Sur la maladie des mûriers-mûres ..... *Nogakshokshi*, U. Suzuki.

Essais et faits divers:

Investigation de Fonketsu (fonketsu de Somaguchi à Yamanashiken).

Brevet d'invention des appareils et des outils destinés à l'élevage des vers et à la filature.

Résumé du résultat du conditionnement des graines pendant l'exercice de la 34me année de Meiji.

Statistique:

Tableau de l'exportation et de l'importation des soies et des soieries pour le mois de Juin 1903 comparé avec celui du mois correspondant de 1902.

Questions et Réponses:

Sur l'époque favorable à la greffe.

Sur le *spinig Sericaria*.

Sur la magnanerie.

Sur le procédé de distinguer les cocons dans lesquels se trouvent les *spinig Sericaria* parasites.

Sur la construction de *Fonketsu*.

Marché des Soies:

Marché de Yokohama.—Marché de New York.—Marché de Lyon.—Marché de Milan.—Marché de Shanghai.

Nouvelles étrangères:

La sériciculture en Chine.

L'industrie soyeuse en Amèrique.

L'importation des cocons doubles chinois.

L'industrie soyeuse en Siam.

L'élevage des vers-à-soie en Amérique.

La sériciculture en Afrique.

Question sur les droits d'importation de fil en fuseau de l'Amérique.

Nouvelles diverses:

Nomination des commissaires techniques.

etc, etc, etc.

明治廿五年四月七日內務省認可（明治廿六年五月廿八日）

TOKYO

Association Sericicole du Japon. No. 2. Mitoshirocho, Sanchome, Kanda, Japon.